
D.R.E.S.S.

藤平重工

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・R・E・S・S・

【Nコード】

N4375F

【作者名】

藤平重工

【あらすじ】

世界でも有数の巨大財閥の一つ「鷹堂財閥」。ある日、その一人娘「鷹堂舞華」にお見合いの話が持ち上がる。親に何でも決められてしまうことへの反発から、舞華は鷹堂財閥が保有する特殊戦力「D・R・E・S・S・」(Defense Reaction Expert Security Service)を引きつれ家出してしまう。ひよんな理由から、とある高校を家出先に選んだ舞華はこの生徒「高郷祐一」をなぜか「副司令官」に任命する。とまどう祐一だったが、さまざまな出来事を通してメイド達と交流を深めていく。

しかし、そんな日々は長くは続かなかった。やがて、強大な「追撃部隊」の影が彼女達に襲い掛かるのだった・・・

第1部（前書き）

自作同人ゲーム用に書き下ろしたシナリオです。

制作ブログ↓<http://synthesize2.blog4.fc2.com/>

今回は短編にしました。 よろしくお願いします。

第1部

「東館に展開している第5から第8小隊には現状を維持させる。ヘルヴォルの隊を援護に向かわせる」

突き抜けるような晴天の下、品格を感じさせるアンティークで統一された屋敷の窓辺に、給仕服を身にまとった少女たちが、まるで何かから隠れるように背を低くして集まっていた。

そこへもう1人。何か荷物を携えた、やはり給仕服を着た少女が現れた。

…いわゆる“メイド”である。

「第4小隊の浅野です。伝令と補給に戻りました」

やはり背を低くして現れたメイドは、その集まりの中心にいるメイドに声をかける。

「ご苦労。で、旦那様はなんと？」

「旦那様たちは中央館に留まるということです。護衛には「ノルニル（第1近衛中隊）」と「アムシャ・スプンタ（第2近衛中隊）」が就いています。「ヴァルキリー（第3近衛中隊）」は第一防衛大隊とともに、敵勢力の無力化に全力をつくせ、とのことですよ」

言いながら、少女は携えていた荷物から、いくつかの箱を取り出す。「すみません。M16か89式を用意できればよかったのですが…」
その中に入っているのは、5・7mm×28のP-90専用カートリッジ弾。

見ると、彼女たちは全員、サブマシンガン「FN P-90」を装備していた。

「無いのなら仕方あるまい。本邸の防衛は防衛大隊に花を持たせてやらないとな。よし、我々はこれより正面玄関の敵主力を迎え撃つ。フレックとエルルーンはどうした？」

耳を澄ますと、かすかに聞こえるのは、銃声。

「隊長たちは、西の格納庫前で敵部隊に足止めされています。RP

Gを装備しているようで、手間取っています」

予備弾倉をメイド服のポケットに収納する。弾倉はピッタリ収まった。

「いや、これはメイド服ではない。彼女たちが着ているのは、メイド服のような『戦闘服』だ。

「ふむ、ならばレルルの隊にだけでも、合流するように伝えてくれ。直接正面玄関に向かうよ…伏せる!!」

指示を出していたメイドが叫ぶと、間をおかずに窓際に置いてあった花瓶が砕け散った。

続けて木製の窓枠が次々弾ける。

正面から迂回してきた、敵の遊撃部隊だ。

中東系の顔をした数人の男たちが、すばやく左右に散りながら距離を詰めてくる。

しかし、全員バラバラの装備ゆえか、あまり統一感はない。装備している小銃も一世代前の旧式だった。

「ちっ！応戦！」

敵の斉射が終わると同時に、窓枠から銃口のみを出した、全員のサブマシンガンがそれぞれ目標を捕らえた。

「撃ち方、はじめ！」

乾いた発射音と共に、5.7mm弾が目標へと殺到する。

それは彼らのボディアーマーを貫き、人体の奥深くに突き刺さる。

「敵戦力歩兵5！小火器装備、脅威レベル2！」

「——ぐはっ…！」

敵戦力を分析していたメイドが言い終わるのとはほぼ同時に、最後の敵兵が崩れ落ちていた。

「状況報告！」

「敵勢力完全に沈黙。損害なし、作戦続行に支障なし」

浅野と名乗ったメイドが、瞬時に成果を分析、報告する。

指示を出していたメイドが立ち上がる。

残弾確認。ほとんど減っていなかった。

「では、レルルの隊には直接玄関に来るように伝えてくれ。二人はヤツらの後始末を頼む。残りは私について来い」

彼女たちは一つ頷くと、それぞれの目的地へと駆け出していった。

十分後、敵勢力は完全に沈黙した。

— D・R・E・S・S・ F I R S T —

「今回の攻撃も小規模だったようだな。奇襲にもかかわらず、13分しか持たぬとは。まあ、故に奇襲なのだろうが。・・・で、さっきの話の続きだな」

「・・・え？」

「・・・おい。聞いているのか!？」

苛立ちを孕んだその声に、私は意識を上に向ける。

「・・・え？」

どのくらいお父様は話していたのだろう。いつの間にか雑誌を読むのに集中してしまっていたようだ。

——「週刊 スポーツ野郎」今号の特集はこの間行われた高校陸上の全国大会についてだ。

——そこには、今年優勝した熊田高校陸上部へのインタビューが載っている。

お父様はそんな私の様子を見るとため息をつき、再び窓の外へ顔を向ける。

「まったく。これだから・・・。いいか？お前はいずれこの・・・なんだろう、さっきからドキドキと鼓動が早い・・・。頭が・・・ぼうっとする。」

「・・・だから、今回はこの間新調したドレスを着ていきなさい。
くれぐれも先方に失礼のないようにな」

・・・先方？

「ずいぶん手間取ったが、やっと話がついたんだ。失敗は許されん
そこまで聞いて、やっと頭が覚醒してきた。」

「・・・え？失敗できない？」

顔を外に向けたままのお父様は、私の言葉が聞こえなかったのか、
そのまま言葉を続ける。

「これで一ノ瀬家との関係を作れば、わが一族のさらなる繁栄に
つながる」

お父様の声が部屋に響く。今、居間には私とお父様しかない。い
つもは十人近いが控えているのだが、今はお父様が下がらせていた。

「・・・まさか、お父様」

「『血は水よりも濃い』。血縁関係ほど確実な信頼関係はないから
な。それに相手は噂に名高い一ノ瀬の御曹司だ。悪い話ではない」
そうか、重要な話って・・・！

—— お見合い —— !!

「私はそんな話聞いてない！なぜいつも勝手に決めてしまうの!?」
いつもそうだ。私の意思に関係なく、知らないうちに私のことが決
められている。

憤慨する私を見て、お父様は再びため息をついた。

「・・・やはり聞いていなかったのか。まあいい、この件はもう決
定したことだ。わかったら、新調したドレスに袖を通してみなさい」

「・・・!!もういい!!」

私は踵を返すと、出口へと向かう。

「私、お見合いなんて絶対出ないから!!」

ドアを開ける前にそう言い残して、私は居間を後にする。

背後で、お父様のため息が聞こえた気がした。

「あーもう！なんでいつもこうなの!!」

私の部屋で、私はこの行き場のない怒りをクマのぬいぐるみ（1／1スケール）とのスパーリングで発散していた。

「お嬢様、落ち着いてください」

私付きのメイド長——白神^{しろかみ} 綾香^{あやか}がぬいぐるみに哀れみのこもった視線を向けながら、私を諭そうとする。

「なんで！？なんでいつも私の意思が無視されるのよ！」

「そんなことは・・・。旦那様はお嬢様の将来を考えられていらっしゃるのです」

「人生を勝手に決められたら迷惑なの！もういい、綾香」

こうなったら徹底的に抵抗してやるんだから。絶対お見合いには出ないんだから！

・・・家出してやる。

「・・・はい、なんででしょうか」

「『ヴァルキリー』を緊急招集。直ちに出撃準備に入りなさい」

「は？出撃・・・ですか？」

普段は冷静な綾香も、さすがに驚いたようだ。

「ええ、名づけて『お父様に目にも物を見せてやるんだから！屋敷脱出大作戦』よ！」

「・・・」

ふふ、もうお父様の言いなりになんてならない。結婚相手ぐらい自分で決める！

「決行は今夜。それまでに集まれるだけの物資を集めなさい。お父様たちはもちろん、他の使用人にも気付かれないようにね」

「しかし、お嬢様。旦那様に無断で『ヴァルキリー』を動かすということは・・・」

「綾香らしくないわね。・・・作戦名は？」

「え・・・『お父様に目にも物を見せてやるんだから！屋敷脱出大作戦』・・・です・・・」

綾香の頬がほのかに朱に染まる。

「・・・」

人に言われると、かなり恥ずかしいわね。コレ。
もうちょつと考えたほうがよかった・・・かな？

「と、とにかく、わかったでしょ？」

「ええ、しかし本気なのですか？」

「本気も本気よ。わかったなら早く『ヴァルキリー』を集めに行つてきて」

「・・・」

まだ一言言いたそうだったが、一礼して部屋を後にする綾香。

「『ヴァルキリー』を動かせば、お父様も考え直してくれるハズ」
私にだって意思はある。私はもう子供じゃない。

「自分のことは自分で決める」

そのこと、今夜ハッキリさせてやるんだから！

私、^{たかどう}鷹堂 ^{まいか}舞華は決意した。

それが、どんな結果を生むのかも知らずに・・・

夜、鷹堂本邸内、第3脱出経路。

嚴重な警備を誇る鷹堂本邸が敵の手に落ちる、という最悪の事態に備えて地下に作られた逃げ道のひとつである。（逃げ道といっても、軍用車が楽々通れるほどの規模があるのだが）

「お嬢様、『ヴァルキリー』各員配置に就きました。いつでも『出撃』できます」

整然と並べられた装甲兵員輸送車を背に、『ヴァルキリー』各小隊員が整列する。

——鷹堂財閥 私設自衛軍『D・R・E・S・S』 第3近衛中隊『Valkyrie』。

強大な財力と権力を手に入れ、栄華を誇る『鷹堂コンツェルン』だが、それゆえに敵も多く、国内に留まらず世界中から、鷹堂総裁の自宅である鷹堂本邸などに組織的なテロ（ピンポンダッシュからRPG（Rocket Propelled Grenade）の

略で、日本語に直すなら「ロケット推進式榴弾」による砲撃まで）が毎日のように繰り返されるようになる。

そして、それらのテロに対抗するために組織されたのが私設自衛軍（正確には組織）『D・R・E・S・S』（Defense reaction expert security service（防衛対応専門警備隊））である。

この組織の構成員のほとんどは女性で、普段はメイドとして家事一般をこなすが、いざ有事となると要人の安全確保及び敵性勢力の無力化に全力を尽くす。

人員の規模こそはとも『軍』などとはいえないが、鷹堂コンツェルンの総力を結集して開発された各装備は世界最強といっても過言ではなく、事実設立以来『D・R・E・S・S』は一度も敗れていない。

出典：『現代の特殊部隊完全解析』 民明書房刊

『D・R・E・S・S』は大きく分けて鷹堂一族に仕える第1～第3までである精鋭部隊『近衛中隊』とその他の部隊に分けられる。

第1～第3近衛中隊はそれぞれ鷹堂総裁、総裁夫人、そしてその娘・舞華の直属として仕える。

つまり、第3中隊『ヴァルキリー』は舞華が唯一指揮権をもつ部隊というわけだ。

その『ヴァルキリー』中隊は4つの小隊によって編成されている。

私は目の前に整列している各小隊長の顔を順に見回した。

・第1小隊長 白神^{しろかみ} 綾香^{あやか} コードネーム：ヘルファイ

私に仕えるメイドの長にして『ヴァルキリー』最強の実力者。何よりも私のことを考えてくれるメイドの鑑。

・第2小隊長 天川^{あまかわ} 砌^{みぎり} コードネーム：ヘルヴォル

幼い頃から『D・R・E・S・S』の隊員になるべく訓練された「養成組」の出身。何事にも動じない、おとしやかな大和撫子（しかし男にはあまり耐性がない）。

・第3小隊長 北御門 きたみかど 琉月 るづな コードネーム：レルル

自身も華族ながら、長年にわたって鷹堂家に仕えてきた一族の出身。故に、その所作一つとっても気品が漂う。

・第4小隊長 椎名 陽姫／彩夜（しいな あき／あや） コードネーム：フレック／エルルーン

一人ひとりの戦闘能力は決して高くないものの、そのコンビネーションは他を圧倒する双子。そういった事情から特例で「2人で1小隊長」として登録されている。

「お嬢様、ご命令を」

私は頷き、一歩前に出る。

「これより『ヴァルキリー』は本邸より移動する！可及的速やかに本邸を離れよ！」

・・・決まった。

「・・・お言葉ですがお嬢様」

「うん？」

「移動先は・・・？」

「・・・あ」

・・・しまった。考えてなかった。

「お嬢様。今ならまだ間に合います。すぐにお部屋に戻ってください」

「そ、そんなのイヤ！今夜こそお父様に考えを改めてもらうんだから！」

「お嬢様・・・しかし」

「行き先があればいいんでしょう？だったら・・・」

そのとき、頭に思い浮かんだ一つの場所。「週刊 スポーツ野郎」の特集で紹介されていた・・・。

「・・・熊田高校・・・」

「熊田高校・・・ですか？」

「そうよ。これで文句はないでしょ？いざ、出陣！..」

言っと、私はさっさと専用車両に乗り込む。

「はあ……。敵は高校にあり」なんて、冗談にもなりませんよ、お嬢様……」

『ヴァルキリー』を乗せた軍用車が、隊列を崩さずに脱出路を進む。それらはやがて、漆黒の中に見えなくなっていた。

翌日、私立熊田高校

真夏の校庭に火薬の炸裂する音が聞こえる。

その破裂音を合図に、僕たちは弾けるように前に飛び出す。全身の筋肉を一瞬で全開にして、爆発的な加速力を得る。

……ゴールを走り向けるのは、たった数秒後だ。

「ふう。今日も暑いなあ」

脇の芝生に座り、カラカラの喉に温まったポカリを流し込む。

真夏の校庭にいるのは、合宿をしている陸上部の部員だけだ。

「おい、高郷——桑島が部員全員F組に集まってるよー！」

使い終わった練習道具を片付けに行っていた岡山が、大声を張り上げている。

ちなみに桑島とは俺たちの顧問だ。

「わかったー！すぐに行くー！」

……いったいなんだ？ただでさえ今は夏休み中で生徒自体それほどいないのに……。

なぜ呼び出されたのかわからぬまま、俺たちはF組の教室へ向かう。

——私立熊田高校。

全国的にもちよつとは名の知れた高校で、特にスポーツの分野に力を入れている。

人事のように言っている俺はスポーツ特待生（陸上）なのだが。

なぜか人里離れた山の中にあり、外界との繋がり是一本の道路だけ。そんなわけで全寮制である。今は夏休み中なので、基本的に生徒は

帰省しているが。

熊田高校 1年F組教室

「あーなんだ。この時期になんなのだが・・・転校生を紹介する」
「・・・は？」

今は合宿中の部活動員しか学校に残っていないとはいえ、さすがに一つの教室に詰め込むとギョウギョウ詰めになっていた。

ただでさえ酸素が足りない状況だというのに、桑島のヤツ、さらに酸素が足りない発言をしやがった。夏休み中に転入とか意味不明なんです。

「あー、・・・どうぞこちらへ」

こちらの疑問などさっぱり無視して、その『転校生』とやらを向かい入れる桑島。

しかしなぜ敬語？

そして入ってきた3人の女生徒(?)。

・・・なぜ3人？っていうか後ろの二人が着てるのって、その、一般的にいう・・・メイド服ってやつだよな？

一同の視線を一身に集め、少女は宣言する。

「こほんっ。私はアテナ。後ろの二人は『Dress』第3中隊所属のヘルフィとヘルヴォルです。もちろん本名ではありませんが、・・・只今を以って、一時的にこの熊田高校を第3中隊『ヴァルキリ』の管理下に置きます。一切の危害は加えませんが、一切の質問は受け付けません。抵抗したい方は今のうちにどうぞ。苦しまないように葬ってあげます」

「「「「・・・？」「」」」」

「おい、それじゃ話が違うぞ！なんだ管理下に置くとは！」

話が理解できない俺たちに対して、急に怒りだす桑島。

「連れて行って」

「・・・は」

少女は桑原に一瞥をくると、後ろの二人に告げた。桑島を両側から抱えると、あっという間に教室から運び出していくメイド二人。
「あ？なんだ、え、ちよつと、やめる離せコラちょ、あ・・・」
ぴしゃり、と引き戸が閉められた。

「・・・・・・」

「了解したなら、あとは『ヴァルキリー』の指示に従って・・・
あと、高郷^{たかさと} 祐一^{ゆういち}は視聴覚室へ来て」

それだけ告げると、教室を出て行く少女（アテナと名乗ったか？）。
そのあとは、俺が全員の視線を浴びる番だった。

・・・俺、なんかしたか？

視聴覚室

・・・とりあえず、ノックしてみるか。

「えーと、高郷ですけど・・・」

「ええ、入って」

あの少女の声だ。中に入る。

「よくきたわね、歓迎します」

すでに視聴覚室の主になっている少女。

「改めて。私の名前は鷹堂 舞華。彼女は白神 綾香」

「え？でもさつきはアテナとかなんとか言ってたんじゃない・・・」

「彼らは知らないほうがお互いいいの。でも貴方はそうはいかないわ」

「・・・？なんで？」

俺と奴らの決定的な違いなんてないと思うが・・・。

すると舞華はにんまりと笑った。まるでおもしろいイタズラを思いついた子供のように。

「こほんっ。えー只今を以って高郷 祐一を第3中隊『ヴァルキリー』副司令官に任命します。パチパチ」

「パチパチ」

「・・・・・・・・」

なにいつてんだ？っていうか口だけで拍手されても全然うれしくないんですけど。

「じゃあ、早速副指令としての初仕事をあげるわね」

「ちょ、ちよつとまで。なんで俺なんだ？せめてそれだけでも教えろ」

「え、なんでって・・・」

俺としては当然の質問だと思うのだが、なぜか舞華は顔を真っ赤にして口ごもってしまう。

「貴様はスポーツ雑誌にも取り上げられて、この学校の中に知らない者はいないらしいじゃないか。お嬢様はこの学校のことはなににご存知でない。生徒たちを統率するために、この学校のカリスマが必要なのだ」

「・・・知られていたって、人気者とは限らないがな。」

まあ、そういう理由から任命したとなれば、あながちはずれでもない。事実俺は友達が多いほうだ。

「一応確認するが、辞退は出来ないんだな？」

「あ、あたりまえでしょ。私直々の任命なんだから、謹んで受けなさいっ」

「あとひとつ。お前たちは学校なんか占拠して、一体なにをする気なんだ？」

「それは・・・軍事機密よっ」

軍事機密って・・・半分教えたようなもんじゃないか？

「とにかくっ、時間がないわ。祐一は各小隊の作業状況を見回って、手伝いが必要なようだったら手伝ってきて」

「そんな漠然と言われてもな・・・とりあえずどこから行けばいい？」

「校庭に向かえ。ヘルヴォルの第2小隊が補充物資の試験運転を始めている」

「・・・なんかこの人たち、まともなことちつとも話さないな。」

補充物資って運転できるものなのか？

「とにかく、早く行け。小隊は全部で4つある。全て回って来い」
それに、なんでこの白神さんはこんなに不機嫌なんだ？

「ほらっ、早く回って来てっば」

しかたない、とりあえず校庭に行くか。

第2部（前書き）

ゲーム用のシナリオです。

コミケなどに参加しています。

制作ブログ↓<http://synthesizer2.blog4.fc2.com/>

第2部

——そこには、巨人がいた。

「六式汎用人型決戦兵器 殺駆2（ザクツ）です。もともとは拠点攻略用に開発されたものですが、まあ敵の士気をそぐという意味では、防衛にも役立ちます」

「・・・なにか手伝うこと、ある？」

今さっき天川と名乗った少女は、このなぞの巨人兵器を見上げていた俺に説明を始めていた。

「今から、この兵器の試験運転をします。貴方はその補佐をしてもらいます」

「・・・え？乗るの？これに？」

なんか一歩動いただけで一般人には耐えられなさそうなのですが。

「大丈夫です。シートベルトをしていれば外的なダメージはありません」

「内的なダメージは？」

「・・・くどいですね。第2小隊集合！」

天川の号令、あつという間に集合するメイドたち。

「副司令殿を殺駆に乗せて差し上げて」

すると、いきなり俺の体を抱えだすメイド×4。

「ちよ、ちよっと待て！わかった。自分で乗るから離してくれー！」

六式汎用人型決戦兵器 殺駆2 コックピット

もともと単座式なので、二人乗りはかなりキツイ。

「ちよ、もうちよっと下がってください。操縦に支障がです」

「んなこと言っただって・・・」

そもそもスペースがないんだから、これで精一杯だ。

「しょうがないですね・・・これより人型決戦兵器 殺駆2の試験

運転を開始します。機開始動」

聞いたこともないような、独特の駆動音を発するエンジン。

「なあ、このロボットのエンジンはなんなんだ？」

「超小型融合炉エンジンです」

「・・・聞かなかったことにしよう。」

「各計測器正常。スタビライザー正常。システムオールグリーン。歩行を開始します」

ゆっくり立ち上がった巨体を、前に進ませる。

「あ、意外と衝撃が少ないな」

「歩いているだけですしね。オートバランサー正常と。・・・速度上げますよ」

「え？あ、ちょっと待って・・・！」

俺の制止も間に合わず、スムーズに加速する殺駆2。

「そっちの方向には・・・」

「え？なにかあるのですか？」

そう、あそこには一昨日の夜、合宿に参加した陸上部員総出で作った・・・。

「対桑島用の特大落とし穴が・・・」

「なんでそんなのあるんですかー！！！！？」

「いやー、・・・合宿のお約束ってヤツ？」

ガコッ。

「うわわああー！！」

「きやあっ！？」

予想通り落とし穴に片足を突っ込み、バランスを崩す殺駆2。

コックピット自体が傾斜し、体が前に投げ出される。

「くそっ！」

なんとかバランスをとろうと、がむしゃらに手を伸ばす。

ふにゅ。

「きや、どこ触ってるんですかバカ——！！！」

どっっ！

なぜか天川のナックルブローを鳩尾に受け止めるハメになってしまった。

「ぐふっ！・・・ちょ、落ち着け・・・！」

「そっちが触ってきたんじゃないですかヘンタイ！」

「がふっ！！おぐっ！！・・・だから殺駆が・・・げふっ！」

「え？殺駆？」

見ると全速力で迫る校舎。

「ちよっと、ぶつかる！！？」

「何事だこれは！？」

私と綾香が校庭に駆けつけると、そこでは巨人が踊り狂っていた。

「私たちにも詳しいことはわからないのですが・・・おそらく落とし穴にはまったことが原因かと・・・」

自身もまだ良くわかっていないという顔で、第2小隊の隊員が報告する。

最新の試作機である殺駆2は、最高の機密であり、「ヴァルキリー」の隊員たちも、その全容を知っているわけではない。

しかも、今搬入されたばかりであり、これは試験運転であるのだ。つまり、この事態を完全に理解している人間は、この場にはいない。

「中との通信は？」

「いえ。落とし穴にはまったときの衝撃で、スイッチが切られたものと思われます」

・・・となれば、これは原因不明の、完全な『暴走』。

「融合炉の溶融は始まっているのか？」

「いえ、今のところ出力は安定しています。しかし・・・」

「このまま無理な動きをしていけば、それもありえる」

私は静かに言う。コクン、とうなずく第2小隊員。

「お嬢様・・・」

あの殺駆2は先日一通りのテストが終わったばかりの試作品。一秒

後になにが起こってもおかしくない。ただでさえあの巨体を動かすために、融合炉まで積んでいるのだ。

「お嬢様、決断はお早いほうが・・・」

「わかっているわ・・・」

でも、あの中には・・・しかしそれだけで多くの人を犠牲にはできない・・・！

「・・・遠隔爆破装置をここへ持って来て。それと全ヴァルキリーをここへ」

「お嬢様、それは・・・」

「只今を以ってわが軍は人型兵器『殺駆2』を廃棄！直ちに遠隔操作によって爆破する！」

「・・・イエス・マスター了解しました。お嬢様」

・・・まだ爆破装置の準備には時間がかかるはず。

それまでに事態が動かなかった場合、問答無用で爆破しなければならぬ。

・・・せつかく私が副司令にしてあげたのに、なんにもせずに死んじゃうなんて許さないんだから！

祐——！！！！

「く、くそっ！こうか？こうなのか！？」

「や、ちよつとそこは・・・きゃあ！」

なんとか俺が操縦を奪うことでさっきの危機は乗り切ったものの、信じられない動きをする殺駆に翻弄され、どっちが上かもわからなくなってしまうていた。

「だからちがうって言うてるでしょ！バランサーがおかしいんですっ！」

どっつ！

「ぐふっ！鳩尾はやめてくれ・・・」

よろめいて腰を突いた先、なにかを押した感触が・・・。

「警告！ジェノサイド・スイッチがオンになりました！これよりジ

エノサイド・モードに移行します！警告！・・・」

ジエノサイド殲滅モード！！？？

「お、おい！なんだよこれ！？ジエノサイド・モードって・・・」

閃光。

殺駆2が手にしたマシンガンを乱射していた。

「ちょ、やめ、やめてください！！」

「俺は知らないって！とにかくなんとかしないと・・・」

そして、ふと見た校庭。

その向こうに、あれは・・・。

あれは、『ヴァルキリー』とかいうメイドたちか！？

すでにかんりの数が集結している。まさか、殺駆を破壊するため！？
制御不能に陥り、マシンガンまで乱射している殺駆を、これ以上被害が出る前に破壊する。

確かに正しい判断ではある。だが・・・。

「ああ・・・ここまでですか・・・」

天川にも『ヴァルキリー』は見えたらしい。声に力がない。

「すでに遠隔爆破装置も準備されているはずです・・・私たちは・・・」

「」

「まだだ」

「え？」

「すでに殺駆はマシンガンまで乱射しているのに、まだ爆破されていない。まだ準備が終わってないんだ」

そう言いつつ、俺は身体をさらに乗り出し、操縦桿を握りなおす。

「でも、どうするのですか？もうこの殺駆を正常な状態に戻すことは・・・」

「balancerがイカれてんじや無理だろうな。だが、わざわざ戻さなくったって、止めることはできるだろ？」

「まさか・・・」

「完全に・・・逝ってもらっ」

幸いにも今の位置は校庭の端。そしてイカれているのは足のbalan

サーだけ。

・・・普通の人はこんなこと考えないんだろうなあ・・・。
そのとき、俺の手が操縦桿から引き剥がされた。

いままでなんとか二足歩行を保っていた巨人が、マシンガンを放り出し、急に前のめりに倒れ始めた。

「下がって！お嬢様！『ヴァルキリー』、応戦！-」

とつさに状況判断し、命令を下す綾香。

「待って！様子が変だ・・・」

確かに、殺駆は倒れながら両腕を前に突き出していた。

「あれは・・・」

つま先が地面を離れると、今度は両手が地面に着く。足と足の間に頭を潜り込ませ、勢いはそのままに上半身を歪曲させる。それと同時に開脚し、腰が地面に着くと同時に勢いに任せ上半身を上げる・・・。

「前転・・・しかも飛び込み↓開脚のコンボ・・・！」

ガコッ！ガガガガガガッ！

180度のきれいな開脚を維持したまま、肩、肘、手、股関節、膝、足首の全バランスー及び駆動系を沈黙させた人型汎用決戦兵器は、止まった。

「・・・」

突然のことに体が動かない私の、手前5メートルで。

「うっ・・・気持ち悪い・・・」

かなり久しぶりに外の空気を吸った気がする。

あんな無茶な操縦をしたにもかかわらず、生きているなんて奇跡的だ。

「オーライ、オーライ！」

『ヴァルキリー』の隊員たちが校庭のど真ん中に沈黙している殺駆を、いままさにクレーンで移動させようとしていた。

・・・自力で動けない殺駆を移動させるのは大変だな・・・。
せわしなく動いているメイド服の少女たちから離れて、俺はその姿を見つけた。

ぱくぱくぱくぱく。

なせか和菓子をやけ食いしている、『ヴァルキリー』第2小隊長
天川砌。

「気分は・・・そんなに悪くないみたいだな」

俺が声をかけると、ぴたっ、と動きを止める。

「・・・いろいろ訓練を受けてますから」

「だな。あの操縦は見事だった」

・・・決戦兵器で前転をしてしまうんだからな。自分の発案とはいえ、どう考えても不可能だ。

それを可能にした操縦技術は、単純に見事だった（訓練でもしないだろうし）。

「・・・・・・」

ずいっ。

無言で差し出されるどらやき。

「・・・・・・？」

「半分は、貴方のおかげですから」

真っ赤に染まった顔を背け、天川が言った。

「ふっ・・・不本意ですが、第3者からみた正当な報酬です」
ずいっ。

・・・とりあえず受け取っという方が良さそうだ。

「ああ・・・サンキュ」

「おれなんて要りません。正当な報酬なんですから」
言っと、天川はまたやけ食いを再開するのだった・・・

真夏の暑い昼下がり 敷地内の雑木林

俺はまるで田植えをするかのようになり、腰をかがめて地面に何かを埋

めていた。

もちろん稲ではない。ではなんだ？

「ここで大ヒント！なんとこれは・・・」

「あ、バカ！そこに埋めたらこっちも誘爆しちゃうでしょ！ちゃんと有効範囲を考えてよ」

怒る『ヴァルキリー』第4小隊長（の片方） 椎名^{しいな} 陽姫^{あき}。

「・・・」

・・・はい、地雷です。圧力を感知するタイプだそうです。

今俺は第4小隊と共に地雷の設置を手伝っているのだが・・・。

「ほんとに学校を占領した目的、隠す気あるのかな・・・」

・・・たぶんないな。自分で言っというてなんだけど。

しかし地雷まで埋めるなんて、まさかここに長く居座る気なんじゃ・・・。

「まったく、なんでこんなヤツが副指令なんだろう・・・」

「・・・」

ま、当然といえば当然だが。それなら鷹堂舞華に言ってくれ。

「陽姫ちゃん。向こうは終わったよ」

違う場所に地雷を設置しに行っていたもう一人の第4小隊長 椎名^{しいな}

彩夜^{あや}が戻ってきたようだ。

ちなみに二人は双子で、陽姫のほうが姉なのだそうだ。

「あ、彩夜。ありがと・・・って、ちよっと祐一！？」

・・・祐一って・・・俺は副指令なんじゃないのか？

「なんだ？どうかしたか？」

「君どこに地雷埋めてるの！？」

「・・・え？」

どこって・・・ちゃんと有効範囲は考えてるぞ？

そして俺は顔を上げ、周りを見渡す。

・・・ここは。

「そこは私がさっき埋めたところ！地雷原のと真ん中！」

・・・マジかよ。

ごくつ。

「いい？そこを絶対動いちゃダメだからね！」

「ど、どうしよう陽姫ちゃん！祐一さんが・・・」

「わかってるって、彩夜。今考えてる・・・」

今設置しているのは圧力を感じするタイプの地雷だ。踏めば爆発する、一番地雷らしい地雷といえる。

まあ逆に言えば踏まなければ爆発しないのだが・・・、位置がバレたら意味ないので、普通わからないように偽装する。

自分が設置した場所ならまだ見当がつくが、他人が、よりによって『ヴァルキリー』によって設置されたものなど、見分けがつくはずがない。『ヴァルキリー』の所属する『Dress』は私設自衛軍です。

そのうえ、誘爆しないように、ぎりぎりの距離設置されていた地雷のなかに、さらに地雷を設置してしまった。この状況で誘爆しないほうがおかしい。

・・・動けない。

「とにかく、安全圏まで避難しよう。祐一は動いちゃダメだからね！」

「き、きつと助けますから！待っててくださいね！」

確保していた安全地帯を通り、距離を置く第4小隊。

「・・・なるべく早く頼む」

「ねえ、どうしよう陽姫ちゃん。なにか良い方法はないかな・・・」

「うーん。良い方法があ・・・」

よりによって姿が見えない地雷に閉じ込められるなんて。

撤去しながらだと時間がかかりすぎるし、強行突破は危険すぎる。

「ねえ、陽姫ちゃんが埋めたところから接近すれば？陽姫ちゃんなら自分が埋めた場所、覚えてるでしょ？」

「悪くはないけど、却下だね」

「え？なんで・・・」

「もちろん私は自分が埋めた場所は覚えてるよ？でも、問題は今祐一が立つてる付近。さっき設置したのは偶然私たちが気付いたけど、その前にまだ近くに埋めてるかもしれない。それに助け出した後も、祐一は私が埋めた地雷の位置を知らない」

「そんな・・・一体どうしたら」

あの地雷は圧力感知型・・・地雷の上部に圧力がかかると爆発する・・・。

だったら地面の上を歩かなければいい。祐一にロープを渡して一気に引き寄せるとか・・・。

いや、いくらなんでも無謀すぎる。上に吊り上げるのは？ここは林の中、木に引っかかるのがオチ。

ん？木・・・？

そうか、木を使えば・・・。

でも私一人じゃとても・・・。

「彩夜」

こくり。

声をかけると、無言で頷いてくれる彩夜。

そうだ、いつだって私はひとりじゃなかった。

いつだって彩夜と一緒にだった。

「急いでロープを用意して！長いやつね！」

私たちは二人で一人。私たちなら出来る。

「な、なんだ・・・？」

なぜか頭上に張られる二本のロープ。安全地帯から安全地帯へ、丁度俺の頭上を通過するように張られているようだ。

「一体何が起こっているんだ？」

詳しく確認したいが、今の体勢を保つのが精一杯だ。

「もしかしてこれに掴まって脱出しろってことなのかな」

しかし、ただでさえ緊張で疲れているのに、それはキツイな・・・。そんなことを考えていると、俺から見えるほうの、ロープが結ばれ

た木の下に、二人が姿を現した。

『ヴァルキリー』第4小隊長 椎名 陽姫／彩夜。

「今助けに行つてあげるからー！それまで踏ん張りなよー！」

「ま、待つててください！すぐに行きますから！」

それはとつてもうれしいんだけど・・・。

・・・どうやって？

すると、二人はいきなり木に登りだした。

「な、ちよつと！何する気だ！？」

「なにつて、今助けに行くつて行つたでしょ」

まったく同じ動作でロープの上に乗る。

「わ、とと・・・やつぱり一本は大変だよお・・・」

「がんばるの彩夜！祐一を助けるんでしょ！」

ふらふらとした足取りで、ゆつくりとだが近づいてくる。

「ふええ、お、落ちちやうよ陽姫ちゃん」

「ちよ、だからつて服掴まないでっ。落ちるっ！」

「・・・・・・」

大丈夫・・・だよな？

「よつと・・・到着」

「わ、私たちの手に掴まつてください」

「・・・・・・」

「何ボケツとしてるのよ。全速力で助けに来てあげたんだから、さつさと掴まりなさいよ」

「いや、非常に言いにくいんだが・・・」

このロープは俺の頭上を通っているわけで。

「その・・・モロ、見え・・・？」

「・・・！！?!?!?!?!」

「きゃ、きゃあー！？」

「この、どこ見てんだよバカ！エロ！ドエロ！」

ぎしぎしぎし。

「わ、悪い、悪かつたから俺の頭の上で暴れないでくれ！」

落ちたら三人とも木っ端微塵だぞ!?

「わ、わかってるよ」

「さ、私たちの手に掴まってください」

左右同時に二つの手が差し出される。

「・・・性格は正反対でも、やっぱり双子なんだな。」

「3、2、1で引つ張るよ。いい? 彩夜」

「うん、いいよ陽姫ちゃん」

「「3、2、1」」

せつ! の掛け声と共に俺の体が浮き上がる。

「や、やった成功だよ陽姫ちゃん!」

「さ、このまま運んであげるから、おとなしく掴まってなよ?」

「お、おう・・・」

左右から椎名姉妹に腕をつかまれ、宙ぶらりんなまま運ばれていく。
「・・・そっぴゃこんな感じに掴まってる宇宙人の写真、前にテレビで見たな。」

——しかし重いなあ。男ってみんなこんなに重いのかな。

予想以上に重い祐一の体を運びつつ、なんとか残り十分のこのころまで来た。

「・・・ここまでくれば安全だろう。」

「さて、と。じゃ、降ろすよ、彩夜」

「ちよ、ちよっと待った!」

「・・・なに? 祐一」

こっちは腕が疲れて限界なんですけど。

「ここは陽姫がいつちばん先に地雷埋めたところ!?」

「・・・え?

私は左右を見渡す。上から見えているためにわかりにくいが・・・。
確かに、私が最初に地雷を設置した場所だった。

「す、すごい! まさか覚えていたんですか?」

「・・・祐一、君は・・・」

『Dress』 早熊高校駐留部隊 司令室（旧視聴覚室）

「・・・以上。報告を終わります」

「ん・・・結局のところ、けが人は出なかったのね？」

鷹堂がチラッと俺を見る。

「はい。奇跡的に死傷者はゼロでした」

「わかったわ。これからよく気をつけて作業して。以上よ」

「はい。失礼します」

陽姫と彩夜、そして俺は視聴覚室を出る。（今は司令室だって鷹堂が言ってたか・・・？）

「・・・それにしても、なんでアイツはああいうときだけ偉そうなんだ？」

「まあ、私たちの司令だしねー。司令らしくしなきゃ、って感じなんじゃないの？」

「ま、舞華は、すごくがんばってるよ」

「ふーん。そんなもんか」

「祐一も私たちの副指令なんだから、しっかりしてよねっ！」

「・・・がんばってください」

第3部（前書き）

この小説はビジュアルノベルゲーム用のシナリオとして書き下ろされたものです。

コミケなどに「螺旋艦隊」というサークルで参加しています。

よろしかったらブログの方もご覧ください。

制作ブログ↓<http://synthesize2.blog4.fc2.com/>

第3部

その日の夜「ヴァルキリー」飯兵舎（旧合宿棟）

今日最後の仕事のために、俺は合宿棟の前に来ていた。

「えーと、第3小隊の隊長は…」

しかし、普通に生きていたら、一生かかっても体験できないような体験を、たった1日で体験してしまった。

・・・昨日までごく一般的な人間だったのなあ。

それが今や私設自衛軍（でいいんだっけか？）の副指令とか、意味わからん。

全員戦闘力ヤバいし。

俺、生きて帰れるのだろうか・・・。

そんなことを考えながら、飯兵舎の階段を登っていくと、2階の扉の一つが勢いよく開いた。

「わー！琉月が怒った！逃げろー！！」

「・・・え？わ、私まで・・・？」

扉から飛び出してきた椎名姉・陽姫と手を引かれている妹・彩夜。

「わっ！？祐一どいてっどいてー！！」

「おっ？——っうお！！？」

一瞬の出来事に反応できない俺を、軽やかなターンで回避する陽姫。そして振り回されながらも、手すりに足をつけ姉に合わせる彩夜。

「・・・なんだったんだ？」

俺が階下を振り返ったときには、もう二人の姿はなかった。

「こらー！ー！！・・・もっつ逃げ足だけは速いんだからっ！」

やや遅れて、一人の女の子がシートを持ってでてきた。

初めてみる顔だな。

「あ。えーと・・・どちら様ですか？」

階段の途中で固まっている俺に気づく女の子。

「ん？あー、なんかおたくのお嬢様に、副指令とやらに任命された

者なんだが・・・」

「あつ、ああ！君が例の・・・！！」

どうやらもう有名人らしい。

「私は「ヴァルキリー」第3小隊長の北御門きたみかど 琉月るづなです。以後お見

知りおきを」

シーツを持ったまま、ペコリと頭を下げる北御門。

「ああ、君が第3小隊長なんだ。じゃあ話がい。鷹堂から「各小隊の手伝い」をするように言われているんだが・・・なにか手伝うこと、ある？」

「え？手伝うこと、ね・・・」

急に言われても思いつかないのか、むう、思案する。
すると、手に持っているシーツに気がついた。

「じゃあ、洗濯を手伝ってもらえる？」

「・・・せんたく？」

巨大兵器の操縦とか、地雷の設置とかじゃなくて？

「ええ・・・不満？」

「いえ！やらせていただきますっ！！」

おかえり、俺の日常。

「実は陽姫が・・・あ、第4小隊長の椎名姉妹は知ってる？」

コクリとうなずく。

「まあその姉の陽姫が、整備用のガンオイルを撒き散らしちゃってね」

ガンオイル・・・

微妙に遠ざかっていく俺の日常。

「で、シーツ総洗濯ってわけ。じゃ、中にまだあるから、持ってきてくれる？」

飯兵舎（合宿棟）一階 洗濯場

合宿棟備え付けの洗濯機（及び乾燥機）は、一階の片隅にまとめて

置かれている。

「さて、これでひと段落だな」

最後のシーツを乾燥機に入れ、スイッチを押す。

「だね。おかげで助かったよ」

手をぱんぱん、と打ち合わせながら、北御門が言う。

「ちよつと休憩しようか」

「ん。そこに椅子があるぞ」

洗濯場備え付けの椅子を二つ出し、座る。

「しかし、大変だな。お嬢様のわがままで、こんな山の中まで連れてこられたあげくに、椎名姉妹の面倒まで見なくちゃいけないんて」

俺も、同じくお嬢様のわがままで、今回の騒動に巻き込まれたからな。

「ん？んー、そうでもないかな。私、妹とか欲しかったから、椎名姉妹も含めて、小さい子の世話とか結構好きだよ」

「へえ。そういうもんか」

今まで会った「D・R・E・S・S」の隊員たちは、みんな小さい子の世話とか苦手そうだったので、素直に意外だ。

「でも、『妹が欲しかった』ってことは、お姉さんはいるのか？どつちかというと、北御門ってお姉さんって感じのにな」

「え？・・・そう見える？」

どうやら後半部分にだけ反応しているようだ。

「面倒見てもらえる「妹」は、小さい子の面倒を見るのが好き、とかなわないだろ」

まあ、北御門と椎名姉妹との身長差も、視覚的に作用しているだろうが。

「そう・・・かな。とりあえず、私には姉が1人いてね。その姉も

「D・R・E・S・S」なんだ」

「姉妹で「D・R・E・S・S」の一員なのか・・・」

そついう意味では、椎名姉妹と一緒にだな。

あいつらは二人で一人前だが。

「でも、私は・・・椎名姉妹がうらやましい・・・」

「え？」

「私たち姉妹は・・・なんというか、ぶっちゃけあんまり仲がよくないのよ」

たはは・・・と恥ずかしそうに苦笑する。

「・・・お姉さんが、嫌いなのか？」

「いや、私は姉さんが大好きだよ。だけど、姉さんのほうが・・・ね」

寂しそうに目を細める北御門。

「そう・・・だな。うん、一般人の祐一にならないかな」

「ん？なにがだ？」

ふと目線をあげると、北御門が真っ直ぐにこちらを見ていた。

「うん。ちよつと君の意見を聞かせて欲しいんだ」

それをはつきりと意識できるようになったのは、中学生の頃からだったという。

ちよつと、北御門が習っていた「北御門一刀槍流」の稽古を、木刀ではなく本物の槍で受けることを許可された頃らしい。

「北御門一刀槍流」。

もともと武家の血筋であつた北御門家は、大政奉還後の明治日本でも貴族の一員として迎えられた。

しかし、そんな「いくさ」と無縁の生活の中でも一族の者たちは鍛錬を重ね、ついに完成させた独自の流派。

この流派の最大の特徴は、「美しさ」を極限まで追及したこと。もともと女系一族ということもあって、使う「一刀槍」は「槍」というよりは「薙刀」を少し小ぶりにしたようなもので、女性でも充分に扱うことが出来る。

技も流れるような「斬撃」が中心で、極めた者が行う「演武」は、まるで優雅な日本舞踊を見ているようだ、と語られるほどである。

そして、当たり前のように、北御門家の次女である琉月はその武道をならっていた。

もちろん、姉である北御門 流麗^{りゅうれい}も。

しかも、2歳年上の姉であるが故に、琉月より2年も前に。

そんな二人が、ある日琉月の「本物の槍」の使用許可を記念して、試合をすることになった。

その試合は、姉であり、2年先輩である流麗が勝って当然の試合だった。

しかし・・・勝ってしまったのは、琉月だった。

お互い全力を出しての、流麗にとつての『完敗』だった。

「私、その時に嫌われちゃったみたい」

そのときを境に、徐々に姉の自分に対する態度が、変わってきたのだという。

始めは、なんとなくよそよそしくなり、しまいには無視されることが多くなっていった。

そんな姉の態度に、琉月はというと・・・

「なにも、何も言えなかった・・・。姉さんに、これ以上嫌われたくなかったから・・・」

そんなぎこちない、誤解を解決できないまま、

流麗は「D・R・E・S・S」へ入隊してしまう。

「そして、私も「D・R・E・S・S」へ入隊した」

元々貴族であった北御門家も、戦後の財閥解体の余波を受け、単体での生き残りは困難となった。

そのとき、救いの手を差し伸べたのが、「鷹堂一族」だった。

今でこそ「財閥」とか「コンツェルン」などと称されている「鷹堂」であるが、当時はまだ貴族の中でも「中の上」程度しかなかった。

自らも破産の危険を冒しながら、彼らは「北御門」を救った。

「北御門」と「鷹堂」に、大した違いはなかったのである。

ただ一点違っていたのは、「鷹堂」は複数の鉱山を所有していたことだ。

「鷹堂」はその後、重工業を發展させ、そこからみるみる事業を拡大。現在に至っている。

一方、共倒れの危険を冒してまで自分たちを救ってくれた「鷹堂」に、「北御門」は忠誠を誓った。

以後、「北御門」は「鷹堂」を護るためにその腕を磨き、その身を尽くすことを生きがいとするようになった。

流麗・琉月姉妹が「D・R・E・S・S」へ入隊することは、いわば決定事項だった。

「・・・ふむ。んで、北御門は「D・R・E・S・S」へ入隊したあとに、お姉さんに聞いたのか？」

「え、なにを？」

「だから、本当に自分を嫌いになったのか、さ」

今の話を聞く限り、琉月は一度も「自分の想い」を口にしていない。

「・・・うつん、そんなの、聞けないよ。・・・こわい」

（いい？いつせーので、一緒に謝るんだよ？）

（・・・で、でも、私なにもしてないよ？）

（そんなこといわないでさっ。ね？いいでしょ？減るもんじゃないし）

（・・・そういう問題じゃないよ・・・）

そのとき、出入り口のほうから、かすかな話し声が聞こえた。

・・・ん？この声は・・・椎名姉妹か？

「どうかした？祐一」

俯いていた北御門が顔を上げる。

「ああ、それがな・・・」

（いつせのーっせ！）

そのとき、勢いよく開かれるドア。

ばああーん！！

「ごめん！！るう・・・つぶ！！」
べちいいーん！！！！

勢いよく壁から跳ね返ってきたドアに、顔面をモロにぶつける陽姫。
思わぬ不意打ちに、大の字にダウン。

「・・・だ、大丈夫？陽姫ちゃん・・・」

後ろから、彩夜が恐る恐る聞いている。

「え、陽姫に・・・彩夜？」

驚いた北御門が立ち上がる。

「ん・・・大丈夫、大丈夫」

真っ赤になった鼻を押さえつつ、答える。

「え、えと・・・とにかく、ごめん！琉月！！それだけ！じゃね！！」

言つと、さっさと退散しようとする陽姫。

「だ、ダメだよ陽姫ちゃん！」

去ろうとする陽姫の襟首を掴み、止める彩夜。

むう・・・華奢な身体に似合わず、意外と力あるな。

さすが「D・R・E・S・S」といったところか。

「わっ！！わかったよ！わかったから離してー！」

手足をバタバタ振り回す陽姫。・・・実際苦しいんじゃない？

「けほつ。あゝ、その・・・さっきはごめん。琉月」

「・・・えと、ご、ごめんなさい」

二人そろってペコリ、と頭を下げる。

・・・ってか、彩夜は謝る必要ないんじゃないかったか？

「・・・」

その様子をじつ、と見ている琉月。

・・・？どうしたんだ？

「・・・も、もしかして、怒って・・・る？」

なんの反応もしない琉月に、陽姫は恐る恐る聞く。

「いや、怒ってなんかいないよ」

ふっ、と微笑む琉月。

「え？ホント！？」

「でも、罰として乾燥機の中のシーツを全部持って行って、ちゃんと敷いておくこと」

ぱつと表情を明るくさせた陽姫に、琉月はぴしゃりと言う。

「ちえー。結局怒ってんじゃない」

「・・・でも、陽姫ちゃん汚しちゃったんだし・・・」

「そうそう。わかったらこんぐらいばやりなさい」

妹にたしなめられた陽姫は、しかたなく乾燥機からシーツを取り出し始める。

1人では無理な量なので、結局彩夜も一緒になって運んでいく。そして二人がいなくなった後。

「・・・祐一」

二人が出て行ったドアを見つめる北御門が、ふいに言う。

「私、ちゃんと姉さんに聞いてみるよ。そして——」

「ちゃんと——言うよ。私の、正直な気持ち」

「・・・そうか」

「・・・がんばれよ。」

「ん。・・・じゃあ、私は部屋に戻るね。椎名姉妹も気になるし」
ドアに手をかけながら、北御門が言う。

「——ありがと、祐一。おやすみ」

言うと、彼女はドアの向こうに消えた。

夕方、俺は鷹堂に呼ばれ、1年F組の教室に来ていた。

一番窓側の机に腰掛けている鷹堂と、そのそばに控えている白神さん。

「別に司令室（旧視聴覚室）でもよかったんじゃないのか？」

「あそこは最終調整中なの。それに・・・」

「それに？」

「ひ、人がいるじゃない」

なぜかむくれる鷹堂。逆光でよくわからないが、顔色も赤いな。

「・・・まあ、いいけど。それで？話ってなんだ？」

「今回の出来事の、経緯を説明しようと思って」

「経緯って・・・思いつきじゃなかったのか？」

「はっ！」

「いてて・・・冗談だつて」

いつの間にあつたのか、手に持った雑誌で頭を叩かれる。

「コホン・・・まず、私は鷹堂コンツェルンの令嬢よ」

「そんなことは「鷹堂」っていう名前聞いたときから気付いてたよ。こんなことできる「鷹堂」は一人しかいないからな」

「はっはっはっ！」

「ちよ、なんで白神さんまで!？」

「お嬢様が真剣に話されているんだ。お前も真剣に聞け」

いつの間にか手にしていた雑誌を握り、白神さんが睨む。

「ヤバイ。あの目はマジだ。」

「そ、そうよ。真剣に聞きなさいよっ」

「わかったよ・・・で？」

「それで、お父様の考えに賛同できなかった私は、あえて鷹堂の家を出て、お父様に考えなおしてもらうことにしたのよ」

「それで、なんでこんなものしいことになっているんだ？要するに家出だろ？」

「まったく。人を巻き込まないでほしいものだ。」

「はっはっはっはっはっ！」

「だから！なんで白神さんは二回叩く!？」

「気のせいだ」

「こほんっ!・・・そこまでしないと、お父様が考えを改めてくれないからよ」

——外がなんだか騒がしくなってきたな。

「鷹堂はそこまでして、その、鷹堂の親父の考えを変えたいのか？」

「も、もちろんよ!」

そこで、なぜか鷹堂は顔を赤くしてそつぽを向いてしまう。
だからなぜそこでそつぽを向く？

「そこはお嬢様なりの考えがあり、旦那様譲りの強い意志があるのだ。察しろ」

・・・んな無茶な。

「とにかく、我々がこの高校を拝借した理由がわかっただろ？」

・・・まあ、だんだん軍事基地化していくこの学校を見ていればわかるが・・・。

あえて、俺はもう一度聞く。これは推測で済ませられることではない。

——そのとき——轟音。

——外で何かの起動音。エンジンのようだ。

「なあ・・・おまえ一体何する気なんだ？」

轟音にかき消されないように、俺は目の前の少女に声を張り上げる。
少女はピクリ、と背中を震わせる。

「何って・・・」

透き通った声。少女は机から降り立ちながら、こちらに振り向く。
近づいてくる轟音。それと同調するように、カタカタ鳴り出す窓ガラス。

「決まってるでしょ」

不意に教室が暗闇に包まれた。

それは轟音の主、大気を振るわせる鋼鉄の石火矢。^{いっぴや}

——戦車が、外からの日差しを遮る位置に、その姿を現す。

その暗闇の中でも、少女の瞳は確かに爛々と輝いていた。

「——戦争よ」

「戦争って・・・本気で言ってるのか？」

「もちろん本気よ。そのために準備してきたんだもの」

「・・・！そんな簡単に言っていていいことじゃないだろ・・・！」

「落ち着け、高郷 祐一。戦争といつても死者が出るわけではない」
「・・・は？」

死者の出ない戦争って・・・それは戦争なのか？

「お嬢様も語弊のある言い方はお止めください」

「ごめんごめん、調子にのっちゃった」

鷹堂はペロ、と舌をだした。

「我々『ヴァルキリー』の制服には、特殊繊維『アイギス（Aegis）』が織りこめれている」

・・・アイギス？

「そうだ。鷹堂グループ内で保有する最新技術の一つで、高性能の防弾繊維だ」

「この「アイギス」は「硬くて弾をはじく」のではなく、「脆く、破けることによって弾の威力を受け流して」人体を守るのよ」

・・・意味がわからないんだが。

「だから。この「アイギス」は、弾が当たったときにあえて「破ける」ことによって、ダメージを外に逃がすのよ」

「要するに、この「アイギス」が入った制服を着ているから、死ぬことはない、と？」

「対戦車ライフルの直撃レベルまでならば、生存の可能性はきわめて高い」

・・・対戦車の直撃レベル・・・。

「でも、こっちは戦車まで持ち出しているじゃないか。やっぱり敵は親父さんなんだろう？」

「そうね。おそらく『D・R・E・S・S』のほかの部隊でしょうね」

「だったらやばいんじゃないのか？戦車に撃たれたらさすがにヤバいんだろ？」

「だな。直撃すればな」

あっさりと、まるで他人事のように言い放つ白神さん。

「・・・！！なんでそんなに落ち着いて言えるんだよっ！！」

「それが『D・R・E・S・S』というものだからだ」

「それが『D・R・E・S・S』・・・？」

「そうだ。『D・R・E・S・S』はあらゆるレベルの脅威に、決して臆することなく対峙し、これを排除する。これが任務だ」

「だからって・・・！！」

「あー、こほんっ。落ち着いて祐一。私たちだって同胞を殺したくはないわ。戦車はあくまでけん制。直撃はさせないわよ」

「しかしだな・・・」

「こほんっ！本題はこのことじゃないの！静かに話を聞いてってば！」

「まだ本題に入ってなかったのか・・・」

「ぼこっ！ぼこっ！」

「・・・・・・」

「「アイギス」はまだ世界中のどの国にも公開していないの。あまりに高性能すぎるからね」

「どういうことだ？」

「高度過ぎる技術は、同時に万人を焼く業火にもなりうる。今は世界にその存在を明かすときではない」

「・・・で？なんでそのことが本題なんだ？」

「だから、一般人である祐一には「アイギス」入りの服を渡せないのよ」

「・・・俺から「アイギス」が洩れる、と？」

「当たり前だ。私たちは完全に高郷祐一を信用したわけではない」

「信用って・・・そっちが勝手に学校占拠して、勝手に俺を副指令に任命したんじゃないか！そのへんの責任は持てよ」

「わかってるわよ。だから私的にも祐一に「アイギス」を渡したいのだけど・・・」

そこで鷹堂はちらつと白神さんを見る。

「いくらお嬢様でもそれだけは無理です。これは鷹堂コンツェルンだけの問題ではないのです」

「・・・で、俺に死ね、と」

「そのことなの、本題は」

「・・・そのこと？」

「責任がとれない以上、祐一はもう副指令でなくてもいいってこと
言いづらそうにする鷹堂は、それでも言う。」

「・・・え」

「この学校には地下に避難施設もある。そこにこもってじっとして
いろ。そうすれば死ぬ危険などない」

「・・・ちよつと待てよ。」

「もちろん、全てが終わった後には全てを忘れてもらうけどね」

「・・・なんでだよ。」

「最初に言っただでしょ？」「一般人には知らなくていい事」だからよ。
あなたは副指令だからここまで教えたけど」

「まあ、一般人として当然の選択だろう。無駄死にすることはない」

「勝手に決め付けないでくれ！」

「耐え切れなくなった俺は、つい大声を出してしまう。」

「あ・・・」

「・・・全てを忘れる？出来るわけないだろう。あんな濃い連中を忘
れるなんて。地下でじっとしてる？そうすれば死ぬ危険はない？お
前らが命がけで戦っているのに？」

俺は・・・

「勝手に決め付けないでくれ！」

祐一が、初めて叫んだ。

「あ・・・」

「・・・そうだ。私もお父様に勝手に、私の大切なことを決められた
ことが嫌でここにきたんだった。」

雑誌「週刊 スポーツ野郎」に載っていたこの高校に。

「・・・いや、今ならわかる。」

——私は、祐一がいる。それだけでこの高校に来たんだ。

でも、今私が祐一にしていることは、お父様が私にしていることと
なにも変わらない。

それが祐一のためだと思っても。祐一に生きていてもらいたい、そ
う思う私の願いでも。

・・・そもそも、祐一を巻き込んだのは私の勝手な願いからだから。
だから、私は。

「だったら・・・祐一は、どうしたいの？」
言った。

「お嬢様！それは・・・！」

「いいの。綾香」

・・・俺が、どうしたいか。

「俺は・・・」

俺の半分がこんなことで命を賭ける必要はない、と言っているのに。
俺は、きっとバカなんだろう。

「俺は、『ヴァルキリー』の副指令だ」

でも、バカだから、きっと俺は俺なんだ。

「貴様・・・」

「確かに、救いようのないバカね」

そういう鷹堂は、しかしふわりと、うれしそうに笑っていた。

「綾香、わかったでしょ？時間がないから手短に副指令殿に状況を
説明して」

「お嬢様、それでは高郷が・・・！」

それでも食い下がろうとする白神さん。

ちよっと副司令官っぽくふるまってみようかな。

さつき雑誌で殴られたお返しだ。

「——くどいぞ、綾香」

副指令っぽく、太い声で言った。

『副』でも司令官だから白神さんよりも上・・・だよな？

「え・・・？」

「すいません、冗談です」

でも白神さんだからな、殴られはするんだろうな。きっと。

「……………」

「どうしたの？綾香？」

「な、なんでもありませんっ！状況を説明します！」

狼狽した様子でプロジェクターのスイッチを入れる白神さん。

「……あれ？」

白神さんの意外な行動に、拍子抜けしてしまう。

「……まあいいか。」

正面のモニターに衛星写真を拡大したものが映し出される。

「まず、本日13：30時に、鷹堂本邸から『D・R・E・S・S・

』の一部隊と思われる装甲兵員輸送車群の発進を確認した」

「……真昼から堂々とよくまあ……。」

「おそらく、本日18：00時に本校に到着する。つまり……」

「決戦は、今夜」

「……今夜か。まったく、こいつらはいつもやることが急すぎるんだよな。」

第4部（前書き）

この小説はビジュアルノベルゲーム用のシナリオとして書き下ろされたものです。

コミケなどに「螺旋艦隊」というサークルで参加しています。よろしかったらブログの方もご覧ください。

制作ブログ↓<http://synthesize2.blog4.fc2.com/>

第4部

早熊高校 校門前 18:30時

校舎前の道路に止められた十数台の装甲兵員輸送車の周りを、漆黒のメイド服に身を包んだ少女たちが忙しそうに駆けまわっている。

「配置を急ぎなさい。19:00時には作戦が開始されます」

——私設自衛軍『D・R・E・S・S』教導団『アシユタロト（Ash tar o t h）』所属 コードネーム：「ヴァナディース」。

80年代に起こった、鷹堂コンツェルンと荒川一門との間での闘争、通称『漆黒に消えた神々』の英雄的存在。

現在は一線を退き、次世代の『D・R・E・S・S』を担う訓練生の教育・訓練を担当している。

「相変わらず熱心なことですね、ヴァナディース先生」

そこに現れる三人の女性。

「貴女たちは・・・やはり作戦に投入されていましたが」

「そんなつれないこと言わないでくださいよ」

「そうですわ、先生。ご機嫌麗しゅう」

「・・・お久しぶりです」

——私設自衛軍『D・R・E・S・S』総司令官 鷹堂総帥直属 第1近衛中隊『ノルニル（N o r n i r）』。

右からコードネーム：「スクルド」、「ウルズ」、「ヴェルザンデイ」。

『D・R・E・S・S』最強の部隊。総司令官直属なだけあり、隊員は3名しかいないにも関わらず、その戦闘能力は半端ではない（『ヴァルキリー』と同等、もしくはそれ以上と言われる）

三人とも『漆黒に消えた神々』を「ヴァナディース」の部下として参戦し、その頭角を現した。

「最強の部隊と訓練生。いくらなんでもアンバランス過ぎな編成ですね」

「仕方ありませんよ、先生。中堅である『ヴァルキリー』が武装蜂起してしまっただからです。この辺りが妥当でしょう」

「それで？作戦はどうするのですか？階級的には貴女たちのほうが上でしょう」

「まあ、私たちが先生に指示を出すなんて・・・とても出来ませんわ」

「・・・賛成だ。指揮は先生がとるのが妥当だ」

「ふむ。でしたら先生は私と共に訓練生を率いて正門より進撃。『ヴェルザンデイ』と『スクルド』で側面を叩く、というのはどうでしょう？」

「私と貴女で陽動・・・とは大げさですね」
「ふつ、と苦笑いする『ヴァナディース』」。

「いえ、違いますわ先生。今も確認できるように、『敵』は汎用人型決戦兵器を主力とした機甲部隊を前面に配置しています。アレを突破するのには骨が折れると思うのです」

「前の闘争では、戦車よりも厄介な式神をわんさか切り捨てていた人のセリフとは思えませんね」

「黙れ、スクルド」

くすくす笑う「スクルド」。それをにらみつける「ウルズ」。

「・・・だが、もつとも効果的な作戦だ」

「そうね、それで行きましょう。その方が訓練生の生存率も高そうですね」

同意する「ヴェルザンデイ」、「ヴァナディース」。

「ではそのように。訓練生への指示をお願いしますよ」

仮設司令部である大型テントを出て行く三人。

「・・・『ノルニル』全隊を投入なさるとは。旦那様は本気なのでしょうが・・・」

『ノルニル』がいなくなっただけ、『ヴァナディース』は一人、つぶ

やいた。

私立早熊高校 標準時間 19:00時

「『ヴァルキリー』討伐部隊全隊員に告げる。私は『D・R・E・S・S』教導団『アシユタロト』所属 【ヴァナディース】三佐だ」

作戦配置についた全隊員に無線放送が入る。

「ひゅう。凜々しいねえ。やっぱり軍隊はこうでなくっちゃな。私も一言言つてこようか」

「・・・ウルズは偉そうにしすぎる。かえって将兵に反感をかわれるから、やめたほうがいいと思う」

「ふふ、違いありませんわ」

「今回の作戦は、『ヴァルキリー』の激しい抵抗が予想されるが、必ずこれを殲滅せよ。諸君ら全員の帰還を以って今作戦は終了とする」

「やれやれ、『漆黒に消えた神々』の英雄も丸くなったもんだ」

「——全軍、突撃！！」

「オラア！行くぞ野郎ども！突つ込め！！」

「・・・ここには「野郎」はひとりもない」

「・・・はあ」

ひとり「スクルド」はため息をついた。

早川高校、正面

「敵が進撃を始めました！」

勇ましい掛け声とともに、人波が溢れた。

「状況開始！！全隊、撃ち方はじめ！！」

一列に配置された六式汎用人型決戦兵器 殺駆2、十式戦車、及び各小隊員の火砲が火を吹く。

一直線に人波へ降り注ぐ数多の煌めき。

人波の幾粒かは、爆風に吹き飛ばされ後方に消える。

「司令部へ通達。——ヘルヴォル、エンゲージ交戦」

一斉射を受けた人波だが、勢いをまったく落とすことなく、押し寄せてくる。

爆風の向こうから姿を現す。

・・・くっ、威嚇にもならないのですか！

「撃ち方やめ！全隊白兵戦用意——抜刀！」

各小隊員はサブマシンガンを放り、各々の得物を構える。

「ははは！！思い切りのいい隊長さんだねえ！！」

「！！」

一人突出していた人影が、襲い掛かる。

火花とともに交わる鋼と鋼。

「・・・ウルズ」先輩

二人は一旦距離をとる。

「ふふ、久しぶりだねえ、『ヘルヴォル』」

『ウルズ』の背後から、人波が追いついてくる。

「くっ、決して敵をここから先に通しません！なんとしても死守します！」

「貴様に、私が止められるかあ！！」

「——！！」

同時刻 『ヴァルキリー』 司令部

「ヘルヴォル及び第1、第2、第3小隊、エンゲージ交戦！」

「敵の数は？」

・・・ついに始まった。

司令室が一気に慌しくなる。

「訓練生3個中隊相当と・・・『ノルニル』所属『ウルズ』を確認
！」

「な・・・！」

「・・・3個中隊相当って・・・ヤバいんじゃないのか？」

「そ、そんな、『ノルニル』ですって？」

しかし、鷹堂はむしろ『ノルニル』という言葉に驚いているようだ。

「他の『ノルニル』メンバーは？」

「敵主力の中には確認できません！」

「やっぱり綾香の読みは正しかったってことだね！」

「さすが白神先輩・・・かも」

鷹堂の護衛のために残った陽姫／彩夜の姉妹が口をはさむ。

そのとき、弾かれたようなオペレーターの声が響く。

「『ヘルファイ』及び『レルル』、^{エンゲージ}交戦！！」

同時刻 早熊高校 東昇降口

しん、と静まり返った校内に、音もなく、ふっと降り立つ影。

「・・・・・・」

「さすが『ヴェルザンディ』先輩。毎度の事ながらお見事です」

しかし、そこには先客がいた。

「我々の設置した地雷原を、こうも簡単に突破なさるのですね」

「・・・『ヘルファイ』か。君にはいつも私の考えていることを読まれてしまうな」

「今日は、私の後ろへは通しません」

『ヘルファイ』は後ろに隠し持っていた何かをゴトリ、と持ち上げた。

「『楯を壊すもの（ランドグリーズ）』・・・か。確かに、^{アイギス}『楯』
に対してこれ以上有効な兵器はないな」

「『ヘルファイ』——^{エンゲージ}交戦」

『ランドグリーズ』を前に突き出し、一瞬で猪突する。

しかし、そこに『ヴェルザンディ』はいない。

「・・・つぶ」

はずれた、と一瞬で判断すると、その場でバック転。『ランドグリーズ』を振り下ろす。

だが、そこにもいない。

「そんな・・・！」

「甘い」

右に姿を現した『ヴェルザンディ』は、逆さになったままの『ヘルファイ』のわき腹を蹴り上げる。

「ぐはっ・・・！！！」

なんとか体勢を戻しつつ、着地する。

「二重残像だなんて・・・ありえない」

「身体とは、一番思い通りに動く、最強の武器だ。極限まで鍛えれば、おのずとできる」

「それ、先輩の口癖でしたね」

立ち上がり、『ランドグリーズ』を構えなおす『ヘルファイ』。

「私たちの実力差は明らかだ。それにいくら君が『D・R・E・S・S』で一番『ランドグリーズ』をうまく扱える使い手だとしても、私に対してその『ランドグリーズ』の重さは逆効果だ」

確かに、『楯を壊すもの（ランドグリーズ）』は『D・R・E・S・S』が装備する『楯^{アイギス}』を一撃のもとに破壊、無力化するためだけに作られた特殊兵器で、鷹堂財閥が『このような事態』に備えて、ひそかに開発したものだ。

しかし、『アイギス』を一撃で破壊、無力化する方法は唯一 ある程度の打撃を、広範囲に与え、しかもある程度衝撃を持続させるというものしかなく、この条件を満たす攻撃を生み出す兵器は、必然的に大型化してしまうのだった。

「一撃でも撃ち込めれば、この戦力差を埋められます」

「・・・それは『撃ち込められれば』の話だろう」

再び『ランドグリーズ』を突き出し突進する。

「はあ！！！」

そして左斜め上に向かって一閃。

「・・・愚かな」

しかし、今度は鳩尾を蹴り上げられ、窓に叩きつけられる。
例外なくガラスを粉碎させた窓は、フレームごと外に脱落する。

「くはっ・・・！」

「・・・何を考えている？」

『ヴェルザンディ』が言い終わらないうちに、立ち上がった『ヘル
フィ』は再び猪突する。

同時刻 早熊高校 西昇降口

人気のない廊下を、音もなく駆ける一つの影。

(・・・だれもいない？いくらなんでも迂闊すぎる)

「止まってください。『スクルド』」

「・・・！！」

急ブレーキをかけ、体を止める『スクルド』。

「お待ちしていました、『ノルニル』の三女『スクルド』・・・姉
さん——！！」

「・・・『レルル』！！」

『スクルド』はあからさまに顔をしかめる。

「よかった。やっと会えた・・・」

「どきなさい、『レルル』」

『スクルド』は、静かに警告する。

「お嬢様を回収する。もしくは、貴女を含め『ヴァルキリー』全員
の掃討。それが今回の任務よ」

「でも、わざわざ私たちが争わなくてもいいじゃないですか。私は
投降します。・・・せっかく会えたのですから、ゆっくり話を・・・」

「

「それは私を油断させる、罠か？」

「え？・・・なにを言って・・・」

『レルル』の言葉が終わらないうちに、得物の槍を一閃する『スク

ルド』。

「ま、待つて・・・!!」

「うるさい！貴女のそういうところが嫌いなものよ！」
後ろに飛びのいた『レルル』を追撃する。

「私の話を聞いて！」

「問答無用！」

『スクルド』の放った突きが、『レルル』の鳩尾をえぐる。

「・・・がつ!!」

10メートルほど飛ばされ、廊下に叩きつけられる『レルル』。

「はあ・・・はあ・・・」

肩で息をする『スクルド』。

「つぐ・・・わかったわ」

「・・・！」

「決着をつけましょう」

——私と姉さんとの。

「・・・っ!!!つくう!!」

「はははっ!!どうしたどうした!!」

ウルズの『叩きつける』斬撃を、ヘルヴォルはただ受け流すことしかできない。

力強くも流麗な動き。直線と曲線が完璧に融合した軌跡には、一分のスキもない。

前に進むことが出来ない『ヘルヴォル』は、必然的に後ろへ退くしかない。

大振りの一撃をバックステップで避け、距離をとる。

「はあ、はあ・・・さすが『ノルニル運命をつかさどる三姉妹』の長。この差は絶望的ですね」

「・・・ふんっ。そう考えている時点で貴様の負けだ」

ヘルヴォルは目だけを動かし、周辺状況を把握する。

実力的に勝る『ヴァルキリー』だが、3個中隊相当という訓練生の

絶大な数の前に、すでに圧倒され始めている。

さすがに3個小隊（うち2個小隊は隊長不在）と3個中隊（12小隊相当）という数の差は、汎用人型決戦兵器をもつてしても埋められなかった。

だが、ヘルヴォルは声を張り上げる。

「敵に一步でもこの学び舎の門をくぐらせてはなりません！ 相手は訓練生です！ 必ず殲滅しなさい！」

「さて、訓練生でない私は貴様に負けるのかな？」

『ヴァルキリー』を鼓舞するヘルヴォルに、嘲笑を浮かべたウルズが問う。

「私は『ヴァルキリー』の一員として、もう少々時間を稼がなければいけません」

「・・・興ざめだ」

両刃の大剣を前に掲げる『ウルズ』。

「こんなくだらん戦争はさっさと終わらせる。悪いが通してもらおうぞ」

「——！！！」

——ただ、真っ直ぐな力の暴風が、吹き荒れた。

「・・・決着ですって？」

「ええ。話し合いがかなわないのなら、哀しいですが刃を交えるしかないでしょう」

「・・・そうね。それで？」

「私が勝ったら、その・・・なぜ、私たちがこんな関係になってしまったのか。その理由を教えてください」

レルルはいつの間にか必死で訴えていた。

「なぜ、なぜ姉さんは私のことを嫌うのですか？ 私の・・・どこがいけないのですか？」

「それは貴女が勝ってからでしょう？」

『スクルド』は一步前に進み、槍を構える。

「お互いの持ち得る最強の技をもって、一撃で終わらせましょう」
「・・・はい、姉さん」

その場で構える『レルル』。

『スクルド』が整えた間合いは、『レルル』にとっても最適な間合いだった。

「ふふ、やはり『最強の技』となればコレね」

「・・・さあ、はじめましょう。姉さん」

空気が、シン、と静まる。

「北御門一刃槍流 一番槍 きたみかど 北御門 るつら 流麗。理に背きその命、貰い受ける——」

「北御門一刃槍流 二番槍 きたみかど 北御門 るつな 琉月。我が意志に則り、力を揮うことを許せ——」

張りつめた空気を裂き、二人同時に間合いを詰める。

「——参る」

そして、同時に発する名は同じ奥義。

「「北御門一刃槍流 極奥義 『花霞』！——」」

鏡に映したように、一秒、一瞬、一刹那の狂いもなく繰り出される極奥義。

まったく同じ動きであるにも関わらず、しかしそれらはどこか違った。

・・・ああ、やっぱり。

——違いがあるとすれば、それは見えない「何か」。

・・・やっぱり、私は琉月に勝てない・・・。

それは、覆しようのない『素質』の差だった・・・。

「・・・姉さん」

「ふふ・・・ついに同じ技で負けてしまったわね・・・」

二本の槍が突き立つ床に、伏す人影は一つ。

「姉さん、なぜ・・・なぜ」

「・・・私は、ただ単に貴女の『素質』が疎ましかった・・・。そ

れがどんなにくだらないことだとわかっていても・・・」

「・・・」

「本当は、私は私、貴女は貴女。『素質』なんて関係ないってことはわかっていたわ。・・・でも、私の心の枷がそれを許せなかった」

ごめんね、と姉・北御門 流麗は一言、言った。

「・・・私は、いつでも大好きですよ・・・姉さん」

ありがとう、と妹・北御門 琉月は一言、言った。

「・・・」

「・・・つふ、はあ！」

右に一薙ぎし、バック転で打ち下ろす！

しかし、またしてもヴェルザンディの蹴りがわき腹に入る。

「ぐはっ・・・！」

『ランドグリーズ』を取りこぼし、廊下に打ち付けられるヘルフィ。

「もう終わり・・・です、か・・・！？」

再び悠然と姿を現した『ヴェルザンディ』が、突然膝を地面につく。

「こ、これは・・・！！？」

力が入らず、珍しく狼狽するヴェルザンディ。

「・・・足の経穴^{ツボ}のいくつかを破壊しました。一時的ですが、立ち上がることはできないはずですよ」

体中の傷が痛むのか、ゆっくり立ち上がる『ヘルフィ』。

「そうか・・・」「『ランドグリーズ』は私の意識をそらすための罠だったというわけか」

ヘルフィの狙いは最初から「『ランドグリーズ』による一発逆転」ではなく。

「真の狙いは、私がお前の隙を突く際の「『カウンター』によるツボの破壊」だったのか」

ヘルフィの本命が『ランドグリーズ』だと思い込んでいたヴェルザンディは、それを避けた時点で油断していた。

——ヘルフィのターンは終わった、と。

しかし、ヘルフィの真の狙いは、その油断によって読みやすくなつたヴェルザンディの『攻撃』だった。

このときだけは、必ずヴェルザンディはヘルフィの体に『触れる』。その瞬間での『カウンター』だったのだ。

これは、『体そのものが最大の武器』であるヴェルザンディの最大の利点であると同時に、最大の弱点である、とも言えよう。

「・・・私は自身の筋力、瞬発力、柔軟性を鍛えることによってこの身体を最強の『武器』に進化させられたと思っていたが・・・確かに『ツボ』は鍛えようがないな」

「人間の身体は武器なんかじゃありません」

ヘルフィは床に転がっている「ランドグリーズ」を手に取る。

「この身体は、『魂』の受け皿です」

「たしかに、これなら『一撃』を加えられるな」

「・・・覚悟してください」

『ヴェルザンディ』に照準を合わせる。

「――起きろ。そして食せよ。『楯を壊すもの（ランドグリーズ）』」

――パアアッン！バタタタタ！！！！

「・・・かはっ」

体中の『アイギス』を破壊された衝撃を受け、全身の筋を切られたヴェルザンディは、その場に崩れた。

「・・・お嬢様」

右腕を押さえ、左足を引きずりながら、ヘルフィは司令室へ向かう。

第5部（前書き）

この小説はビジュアルノベルゲーム用のシナリオとして書き下ろされたものです。

コミケなどに「螺旋艦隊」というサークルで参加しています。

よろしかったらブログの方もご覧ください。

制作ブログ↓<http://synthesize2.blog4.fc2.com/>

苦戦の末ノルニルの二人を撃退したヴァルキリー。しかし、主力部隊が突破されついに最後の一人『ウルズ』が校舎に侵入する。さらに、事態を静観していた『あの人』もついに参戦！？

――『D・R・E・S・S』、完結編です。

第5部

司令室

「我がほうの主力部隊が苦戦しています！『ヘルファイ』及び『レルル』からの応答もいまだありません！」

「我がほうの損失が30パーセントを超えました。敵の防衛線突破は時間の問題です！」

「大丈夫だ！殺駆は足なんてなくても戦える！足なんて飾りだ！」
戦闘開始からすでに30分。悪くなるばかりの戦況を伝えるために、オペレーターたちがひっきりなしに叫ぶ。

「綾香、砌、琉月・・・それにみんな。無事かしら・・・」
さすがに心配そうな鷹堂。

「大丈夫ですよ。先輩たちみんな私たちより丈夫だし」

「・・・みんな、私より強い」

確かに、この『ヴァルキリー』の隊長クラスは桁外れに強い。しかし、だったらなぜ応答がないんだ？戦況は押されている。もしかすると・・・。

「殺駆、損傷率130パーセント！崩壊します！」

グギギギギイイイイ・・・

突然、不気味な断末魔が司令室に響く。

「そんな！殺駆が・・・！」

「・・・彩夜」

「・・・うん。陽姫ちゃん」

互いに目を合わせ、頷きあう椎名姉妹。

「舞華。私たちは主力部隊の援護に向かう。舞華はここで待ってて」

「ま、待って。そしたらここの守りは・・・」

「・・・第4小隊を残していくから大丈夫だと思う」

「そんな、ほんとに陽姫たちだけで!？」

外に出ようとしている陽姫と彩夜が振り返る。

「まあ、『ヴァルキリー』だしね」

「・・・舞華は絶対に守るから安心して」

言っと、二人は扉の向こうに消えた。

ドオオオオオオオオオ・・・ンンン・・・

崩れ落ちる巨人。弾ける歓声。

「・・・くだらん」

つぶやきながら、ウルズは自分の下にあるものを踏みつける。

「敵の切り札は落ちた！野郎ども、突撃せよ！一気に攻め落とせ！」
歓声をあげ、校舎へなだれこむ訓練生たち。しかし、その数は当初の半分にも満たない。

「・・・さすが『ヴァルキリー』。全員いたら歯が立たなかったな」
グリ、と再び下にあるものを踏みつけるウルズ。

「・・・」

ヘルヴォルは気を失っている。

「・・・さて。私も行くか」

主力部隊を失い、『ヴァルキリー』に残る戦力は数人の隊長格、あとはザコのみだ。

それも『ヴェルザンディ』と『スクルド』が同時に攻め入った今、絶望的だろう。

・・・この戦争、決したな。

ゆっくりと中央昇降口をくぐる。

急いでも仕方がない。今頃はもう、訓練生たちが司令室を制圧しているだろう。

「・・・ん？」

床に転がっている訓練生。気を失っている。

「ねえ、私たちの切り札ってもしかして殺駆のこと？」

「・・・お馬鹿さん」

「・・・ほう」

ゆつくりと顔を上げる『ウルズ』。

山と積まれた訓練生たち。全員戦闘不可能にされている。

「ねえ、おばさん。私たちと遊ばない」

「・・・いろいろ置いててもらうけど」

「面白い」

不敵な笑みの形に顔を裂く『ウルズ』。

「貴様らに私が止められるかああああ!!」

「——『フレック』」

「——及び『エルルーン』」

「『エンゲージ——交戦』」

「・・・・・・」

まさかヴェルザンディとスクルド、そして訓練生とはいえ2個中隊を無力化するなんて。

「よもや、とは思うけど・・・」

『業深き美神』としての力が必要なのでしょうが・・・？

その時、上空でかすかに聞こえる、たとえようのない飛行音。

「・・・この音はなんですか？状況を報告しなさい」

耳にはめ込んだ通信機に向かって問う。

「・・・・・・」

「・・・わかりました。引き続きお願いします」

どちらにしろ、決着を急がなくては。

人影は、颯爽と姿を消した。

「そんなチマチマした攻撃で、私が倒せると思っているのか!!」

『ウルズ』が両刃剣を一振りする。たまらず距離を置く『フレック』

と『エルルーン』。

「まったく、元気なおばちゃんだなあ」

「・・・でも、確実に体力は奪ってる」

確かに、すでに『ヴァルキリー』の小隊長級と一戦を交えている『ウルズ』の体力は、確実に減ってはいた。

「よし、もう一押ししよっか」

「・・・わかった、陽姫ちゃん」

左右に別れ、先に仕掛けるのは『フレック』。

両手のベレッタM12サブマシンガンで相手の注意を逸らす。

その後に追撃するのは『エルルーン』。

相手の注意が逸れた一瞬のスキについて、両の円月刀を叩き込む。

これが、椎名姉妹の攻撃の基本パターンである。

「そう何度も何度も・・・」

『ウルズ』が『フレック』の銃撃をものともせず、『エルルーン』に向かって大剣を振り下ろす。

「同じような攻撃が通るか！」

・・・しかし、大剣は『エルルーン』を一刀両断にすることはなく、ただ空を切った。

『エルルーン』は『ウルズ』には何もせず、そのまま駆け抜ける。

「・・・なに？」

『エルルーン』の意味不明な行動に、思わず『ウルズ』はその姿を追ってしまう。

「いつまで彩夜を見てるんだよ、おばちゃん」

「!!!」

そのスキに跳躍し、『ウルズ』の頭上に接近していた『フレック』。

「この距離なら！」

超至近距離からホローポイント弾を撃ち込む。

「ぐう!!!おのれえ!!!」

上からの銃撃を受けた『ウルズ』は、それを避けることよりも、『フレック』を叩き落すことを選択した。

確かに上からの銃撃は、相手に前後左右どの方向に避けられてもすぐに追撃が可能だが、『ウルズ』の攻撃範囲に入ってしまったっている今、それは回避行動のとれない、自殺行為でしかなかった。

「貰ったあああ!!」

こちらに向かって来る『フレック』を迎え撃つため、大剣を持ち上げる。

・・・が、大剣は上がらなかった。

「・・・それ以上は無理、かも」

「!?!なに!?!」

攻撃を『受ける』ことを選択したウルズは、自身の異変に気付くのが一瞬遅れていた。

「・・・『影縫い』」

『ウルズ』の影に突き立てられた二本の円月刀。

「くっそがあああつつつつ――!!!!!!!!!!」

1ミリも動くことを許されず、超至近距離からの銃撃にさらされる『ウルズ』。

「つと。・・・こんなもんかな」

動けない『ウルズ』の頭上を飛び越え、『フレック』は着地する。

「・・・」

『ウルズ』は微動だにしない。(出来ないのだが)

「・・・気を失った・・・かな?」

「・・・はは・・・あははははははははは!!!!!!!!!!」

不意に笑い出す『ウルズ』。

「面白い!面白いぞ!!」

「・・・え、ちよつと・・・」

「・・・」

さすがにあきれる椎名姉妹。

「だが、こんなものではまだ甘い・・・はああああああああああ・・・!!」

『影縫い』で動けない腕に力を入れるウルズ。

「やめときなつて。彩夜の『影縫い』は完璧だよ」

「・・・ズ、ズズズ・・・」

「・・・うそでしょ?」

「ああああああ・・・があー！」

ズリ、と床から引き抜かれる大剣。

「・・・化け物め」

「くく・・・ははは！！次は何で来る！？」

ウルズは完全に体の自由を取り戻した。

「ちっ！！もう一回いくよ！エルルーン！」

「・・・でも・・・」

エルルーンの得物、二本の円月刀はまだウルズの影に刺さったままだ。

「しまった・・・！」

「さあ！どこからでもかかってこい！！」

廊下の真ん中に仁王立ちするウルズ。

そのとき。

「・・・邪魔だ」

ツタン。

「・・・・・・あ？」

突然、ウルズの『アイギス』が吹き飛ぶ。

「白神先輩！！」

ウルズの後ろからゆっくり姿を現すヘルフィ。

「・・・そこをどいていただけませんか？『ウルズ』先輩」

『ランドグリーズ』に次弾を装填しながら、ヘルフィが問う。

「・・・私には用はない、と？」

コクリ、とうなずくヘルフィ。

「・・・！！ふざけるなああ！！」

ウルズは持ち上げた大剣を振り向きざまに振り下ろす！！

・・・しかし、今回もかなわない。

「も、もう一回かけなおした・・・」

さっきとは違う位置に突き立っている二本の円月刀。

「はは・・・ふざけんなよ？小娘——」

——ドンッ！——ドンッ！——ドンッ！——

バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ
ララララララララララ！！！！！

「ぐっ！！くそがあああ・・・！！」

・・・ズ、ズズズ・・・

「！？まだ動く！？」

「・・・」

——ドンッ！——ドンッ！——

バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ
ララララララララララ！！！！！！！

「・・・かはっ・・・！！」

少量の吐血を最後に、ついに『ウルズ』は動かなくなった。

「・・・やった・・・のかな？」

「ら、『ランドグリーズ』を6発も受けたんだから、そうじゃないと困る、かも・・・」

おそろおそろ近づく『フレック』と『エルルーン』。

「それよりも、お前たちはお嬢様のお側にいるはずじゃなかったか？」

ガチャン。

弾が切れたのか、『ランドグリーズ』から銃剣を取り外し、本体を放るヘルファイ。

「え、あの・・・」

「正面の主力が苦戦してたから、援護に出てきたんですよ」

「・・・すると、お嬢様は今お一人か！？」

「いえ、第4小隊を残してきて・・・」

「急ぐぞお前たち。ここにもう用はない」

フレックが言い終わらないうちに、ヘルファイは駆け出す。

「ちょ、ちよつと待って・・・」

「ま、待ってください」

「『ノルニル』所属『ウルズ』の撃破確認！敵の進攻部隊の反応が、全て消えました！」

オペレーターの上ずった報告に司令室の一同が歓声をあげる。

「ま、まさか、私たち『勝った』の・・・？」

しかし、鷹堂はまだ『勝てた』とは信じられないようだ。

「はは、そうさ俺たちは勝ったんだよ！」

俺自身、なんだかとてもうれしくてハイテンション気味になっていた。

「あ、はは・・・こちらに、無事な者はどのくらいいるの？」

「『ヘルファイ』、『レルル』、『フレック』、『エルルーン』、そして第4小隊と司令室要員です」

「すげ、隊長クラスはほとんど残ってるじゃないか！」

「ええ、みんな良くがんばってくれた・・・私のために・・・」

歓喜に沸き立つ司令室の中で、一瞬つらそうな顔をした鷹堂。

「・・・？どうした・・・」

「お嬢様！！」

そのとき、司令室に入ってくるのは『ヘルファイ』。

「綾香！無事だったのね」

「ええ、お嬢様こそ。お怪我はありませんか？」

「まったく、私たちよりも元気だね」

「さ、さすが白神先輩かも」

『フレック』こと椎名 陽姫と『エルルーン』こと椎名 彩夜が続いて入ってきた。

「みんな！無事だったんだな！」

「ま、私たちは『ヴァルキリー』だし」

「か、簡単にはやられないのです」

自慢げに胸を反らす陽姫。心なしに彩夜までもが反らしているような・・・。

「とにかく、一人の死者も出ないまま終わったのは良かったな。こ

れからみんな手当てしないと・・・」

——まだ終わってません。

「・・・え？」

「彩夜!!」

「うん!陽姫ちゃん!」

どこからともなく聞こえてくる声。

『フレック』と『エルルーン』はとっさに得物を構える。

「あの『ノルニル』を無力化できたのですから、そう考えてしまうのも無理はありませんが・・・」

「その声は・・・!!」

ゆつくりと姿を現す『ヴァナディース』。

「そ、そんな、『業深き美神』!?!いつからそこに!?!」

「本当は、『ノルニル』だけで決着がつくのであれば、私は出てくる必要はなかったのですが・・・その『ノルニル』が全滅した以上、私が最後の刺客です」

『ヴァナディース』が得物のレイピアを構える。

「『漆黒に消えた神々』を生き抜いた者として、『ゼウス（鷹堂総裁）』のご命令を全うさせていただきます」

・・・『ゼウス』?そういえば鷹堂は最初『アテナ』って名乗ってたな・・・。

「お父様の命令って・・・私たち全員の確保?」

「それもありますが・・・お嬢様の説得も含まれます」

「お嬢様の説得?投降を、ですか?」

チラリ、と鷹堂を伺いながら、ヘルファイが問う。

「・・・いいえ。貴女ならわかっているでしょう。『鷲峰家とのお見合い』について、です」

「え?・・・お見合い?」

俺も思わず鷹堂の方を見つめてしまう。

「・・・」

俺の視線に気付いた鷹堂は、見つめ返すことはせずに、顔を俯けて

しまつ。

「・・・どういうことだ？」

「お嬢様は近く、鷲峰グループ総帥のご子息と、結婚を前提とした見合いにご出席されるのです」

「それが、この事態とどんな関係があるんだ？」

「一番事情を知っていそうな、というかこの事態を招いた張本人に尋ねる。」

しかし、鷹堂は顔をうつむけ、一言も喋ろうとしない。

「・・・まったく、この男は・・・」

え？、と何かをつぶやいた白神さんに振り返る。

気がつくのと、いつの間にか司令室全員の非難の視線にさらされていた。

・・・え？え、俺？

「・・・とにかく、舞華お嬢様は一緒に来ていただきます。そこをどきなさい」

「聞きうけられないとわかつている警告は、する意味がありません」

「そーだ！そーだ！今まで何のために苦労してきたと思ってるんだ！」

「く、空気を読んで欲しい・・・です」

鷹堂をかばうように『ヴァルキリー』は展開。得物を構えなおす。

「・・・正気ですか？もう一線を退いているとはいえ、私は『ヴァナディース』ですよ？『ヴァルキリー』が敵う相手ではありません」

「この状況でよくそんなこと言えるね」

「そ、そっちこそ正気じゃないかも・・・」

「ふう・・・わかりました」

前に掲げていたレイピアを、右下に下ろす。

「？話を聞く気に・・・」

「せめて、本気でいきます」

——空気が、変わった。

「来るぞ！」

「——『ブリーシंगाメン』」
「がっ!!」

いきなり第4小隊の一人が吹き飛ぶ。

・・・え? いったいなにが!?

「お嬢様! ここは私たちが引き受けます! お急ぎください!」

「綾香・・・でも・・・」

「まだこの『武装蜂起』をした目的が達成されていません! このままでは全てが水の泡です!!」

「え?・・・綾香、もしかして最初から・・・」

「きやあっ!!」

言っている間にも、また一人吹き飛ばされる。

「はやくっ!! いつまで食い止められるかわかりません!!」

「彩夜! 『Dramatization by twin pixie (双子妖精による戯曲化)』 the fifth (終劇)!」

「『The melody of the oblivion (忘却の旋律)』——!!」

「隊長を援護! 撃ち方はじめ!!」

左右から囲むように接近する『フレック』と『エルルーン』。それを後ろから援護する第4小隊とオペレーターたち。

しかし、それでもヴァナディースは動かない。

「——愚かな」

「彩夜、避けて!!」

「——『ブリーシंगाメン』」

視認することさえ許されない神速の突きを、『エルルーン』は事前に回避をはじめていたにもかかわらず、避けきれない。

「痛っ!!」

見ると、エルルーンの右腕の『アイギス』はことごとくちぎれ去っていた。

「お嬢様! はやく!!」

この一瞬のうちに起きた一連の出来事を理解できず、ただ呆然とし

ていた鷹堂が、我に返る。

「祐一！こつちー！」

鷹堂は俺の腕を掴み、ヴァナデイスが入ってきた出入り口とは違う方向——準備室への出入り口へ走りだす。

「お、おい！」

「ここに入つててー！」

扉を開けると、その中に俺を押し込み、再び閉めてしまう。

「なにしてんだよ！お前が逃げないでどうする！？」

「お嬢様！？」

鷹堂の予想外の行動に、その場にいた全員の動きが止まった。

「ヴァナデイス」襲撃という、考えうる最悪の事態になってしまった以上、もう時間はない。

「——祐一はそこでじつとしてて」

「じつとしててっ……お前？」

お嬢様は扉に背を預ける格好で、話続ける。

「彼女の目的は私。そこでじつとしていれば貴方に危害はないわ」

「……」

「もともとは私が引き起こしたことだもの。私が決着をつける」

私たち『D・R・E・S・S』は黙って見守ることしかできない。

「……こんなくだらない戦いに巻き込んでごめんなさい」

その時、外から爆音。

「——来た」

つぶやくヴァナデイス。

同時に、司令室が急に真っ白に染まる。

軍用ヘリコプターのサーチライトだ。

窓と接触するギリギリの距離で、ヘリが滞空している。

「——舞華」

中から出てきた体格の良い人影が、ヘリの発する爆音の中でも良く通る声で呼びかける。

「お父様……」

「旦那様……」

——鷹堂コンツェルン総帥、私設自衛軍『D・R・E・S・S』総司令官『ゼウス』、そして舞華の『父親』。

鷹堂たかどう勝義かつよし

「——『D・R・E・S・S』を動かすということがどういうことか。よくわかっただろう」

シワひとつないダブルスーツを着こなし、悠然と佇むその老いを感じさせない男は、全てを見透かした上で言った。

「——はい」

鷹堂コンツェルンの最新技術とは、すなわち『世界最高水準の技術』。

そしてそれを装備した『D・R・E・S・S』は、本人たちにそんな気ははななくとも、『世界最強の力』だ。

——強大すぎる力は、一歩動くだけでも代償を必要とする。

動く理由があるならまだいい。それは『双方合意の上での戦争』に他ならないからだ。

しかし、理由がない、もしくは相手にとって意味不明なときは？

それは、『不信心にもとづく殺し合い』しか生まない。終点のない、不毛な消耗戦だ。

今回の『ヴァルキリー』の武装蜂起の理由は、果たして日本の、いや世界中の各勢力にとって理解できるものだったか？

——答えは『否』だ。

だから鷹堂総裁はあえて圧倒的戦力を投入し、『親子喧嘩』では収まらない、『紛争』レベルにまで事態を発展させ、世界の各勢力に示しをつけた。

——ウチの娘が申し訳ありません。このように厳しくしつけておきましたので、今回は見逃してください——と。

結果として、『ヴァルキリー』と『ノルニル』、そして未来の『D・R・E・S・S』を担う訓練生に、甚大なダメージを与えた。

これは全て、お嬢様・鷹堂舞華が引き起こしたことだ。
舞華は、この決戦でそのことに気付いたのだ。
そして、自分の立場を、悟ったのだ。

「——ごめんなさい、お父様」

顔を俯けているため、お嬢様の表情をうかがうことは出来ない。
しかし、その声にはかすかな嗚咽が混ざっていた。

「——乗りなさい」

旦那様は一言、お嬢様に言う。頷くお嬢様。

「待ってください！お嬢様はわかつていなかったただけなのです！私たち『ヴァルキリー』がどういった存在なのか・・・」

「綾香。これは舞華が引き起こしたことだ。決着は、舞華自身がつけなければならぬ」

「——ごめんね、綾香。みんな。私がバカだった・・・」

ゆつくりとヘリへ向かって歩き出すお嬢様。

「そんな・・・待ってください！お嬢様を説得できなかった私が全ていけないのです！私がどんな戒めでも受けます！！ですからお嬢様に・・・」

「——くどいぞ、綾香」

「・・・！！」

「——さようなら、祐一・・・」

顔をうつむけたまま、お嬢様はつぶやく。

「・・・そんな・・・私は、私はお嬢様の望みを叶えて差し上げることにすらできないのか？私は——。」

「——おい。人の意志を無視して巻き込んでおいて、最後まで無視して逃げる気か？」

「・・・え？」

全員の視線が、今度は声のした方に向けられる。

——そこには、高郷祐一が立っていた。

「・・・貴様が高郷祐一か・・・」

「な、祐一、なんで出てきたの!？」

「だから言つたろ。俺にも一言言わせてくれ」

高郷祐一は、対地攻撃ヘリに向かって、歩き出す。

「・・・確かに、最初は意味がわからなかったし、理不尽に命令されるのは正直嫌だった。でも・・・この数日間、『常識的にありえないみんな』と過ごした『常識的にありえない日々』は、なんつか・・・楽しかった」

高郷はお嬢様の肩に手を置く。振り返るお嬢様。身長は高郷の方が上なので、自然と見上げる形になる。

「それで・・・まあ。その・・・俺の持っていないものを持っている『D・R・E・S・S』のみんな。その中でも鷹堂」

高郷はお嬢様の目を見つめている。

「俺は・・・お前のこんなことに軍隊を持ち出す行動力というか、単純なことか・・・その、素直になれないとか、そんなのに惹かれたんだと思う・・・ってなんかおかしいな・・・」

「・・・?」

「と、とにかくっ!!」

「——あっ・・・」

鷹堂はお嬢様の肩を後ろに引き寄せ、変わりに前に出る。

「鷹堂総帥!俺をお嬢さんと・・・鷹堂舞華さんとおつき合いさせてください!!」

一瞬、その場にいた全員が凍りつく。

「高郷!貴様なんてことを・・・!!」

「祐一・・・」

「・・・」

「お願いします!!」

言うつと、高郷は深く腰を折った。

「・・・顔を上げる」

顔を上げる高郷。旦那様と眼が合う。

「『ヴァルキリー』は舞華の部下である前に私の部下だ。私が一言言えば、貴様の体は次の瞬間には跡形も残らないだろう。・・・撤回するのなら今しかないぞ」

「撤回する意志があるのなら、最初から言わない」

「・・・」

「・・・」

無言で睨み合う二人。その均衡を破ったのは旦那様だった。

「くくく・・・はははははは！！面白い！この鷹堂勝義に対等に向き合うとは！！貴様相当のバカだな！！」

「・・・」

「『ヴァナディース』！！」

状況の変化についていけず、呆然としていたヴァナディースが弾かれたように反応する。

「は、はい。旦那様」

「私が連れてきた増援部隊と共にこの場から撤退せよ。けが人の収容を最優先。重傷のものは一般の病院でかまわん、とにかく治療を急げ」

「はー！」

「高郷祐一！近いうちに私の私室に來なさい。冷静な頭でまた私と向き合えることに期待する！！」

出せ、と旦那様が言うのと、ヘリは反転し、すぐに視界から消えた。

「「「・・・」」」

しばらく、水を打ったような沈黙が続いた。

「そんな・・・信じられない・・・」

最初に言葉を発したのは、白神さんだった。

「・・・は、はは・・・助かった・・・のか？」

俺も、まだ正常じゃない頭で、つぶやいた。

そして、後ろを、舞華のほうに振り返る。

すると、

「——ばかつ!!!」

いきなり胸板を叩かれた。

「なっ、なんだよいきなり」

今日のMVP間違いなしの俺に向かって、ばかはないだろう。

「バカバカバカ! あんたみたいな一般ピーポーが、お父様に逆らって生きられるとも思ってたの!? 信じられない!」

舞華はいまだにポカポカ殴り続けている。

「いや、さっきは非常事態というか・・・その、突発的な行動というかだな・・・」

自分としても、自分がやったことが信じられないのだが。

「・・・ふう。では私は撤収作業に従事しますか」

事態を静観していた「ヴァナデイス」さんが呆れたように切り出す。

「ほら、貴女たちも。ただでさえ人手が足りないんですから」

「ほーい」「・・・は、はい」

「ヴァナデイス」さんに促され、負傷兵を連れ視聴覚室を後にする椎名姉妹たち。

「・・・お嬢様」

白神さんだけが一度振り向いたが、最後に出口をくぐっていった。

「・・・ホントに殺されちゃったら、どうするのよ」

『D・R・E・S・S』全員が出て行ったあと、叩くのを止めた舞華がつぶやく。

「そんなの考える暇なかったろ。でも・・・」

そこで、俺は一呼吸おく。

ついでにそっぽを向く。

「でも、言ったことはその、咄嗟に出ただけど——嘘じゃないから」

あー。俺の顔、真っ赤なんだろうな・・・。

「う、うん。——ありがと」

ぎゅっ、と舞華が俺のカッターシャツを握り締めるのがわかった。しばらく、俺たちはそのまま動けなかった――。

後日 鷹堂財閥本邸

なぜか俺は、人生初の「燕尾服」とやらを着せられていた。

つか、本物をみるのも初めてだ。テレビでさえ何回かしか見たことない。

「・・・なあ、なんで燕尾服なんだ？」

スーツじゃダメなのか？

「その方が、多少は見栄えが良いでしょ」

ちなみに、舞華は普段着だ。

・・・それだと、むしろギャップがはげすぎて、変じゃないか？
見栄え以前の問題だ。

「ふむ、確かに馬子にも衣装とはこのことだな」

「・・・」

うーん、まあいいか。

それよりも、舞華の親父さんだ・・・胃がズキズキ痛い・・・。

「やべ、ちびりそう・・・」

「ちびつたら、じゅうたん代請求するからね」

「・・・なあ、また別の日にしようぜ。な？」

「ちょっと！ここまできて何言ってるのよ！

うう・・・。

だって、これから「世界の半分を手に入れた」とまで言われている、あの「鷹堂勝義」に会ったんだぜ？

しかも「お嬢さんとお付き合いさせてください」って。

・・・これ、なんていう修羅場？

「・・・体調が悪いんで、後日にしてもらうっていうのは・・・」

「貴様！！天下の鷹堂財閥の総帥たる、旦那様を待たせるとても言うのか・・・！！」

「お父様、連れてきました」

俺と白神さんが言い合っているのを尻目に、舞華がドアをノックしてしまった。

「ちよっ!! まっ・・・」

「いいぞ、入れ」

くそっ! こうなったらヤケだ!!

意を決し、いざ決戦の地へ!!

「失礼し・・・」

「娘はやらん。これは決定事項だ」

「・・・」

その間1秒。・・・俺の決戦、1秒で決着。

マジっすか。

「お父様!」

「だが・・・まあ、付き合うくらいなら、認めるのにやぶさかではない」

マジっすか。

「その代わり、条件がある」

ごくつと息を呑む一同。

すると、机の上に一枚の書類が置かれる。

「貴様が娘に対し強引に性交渉を迫った場合、可及的速やかに貴様の腰から上はスティングァーで跡形もなく消え去る。・・・この誓約書に同意しろ」

スティングァー・・・

それって対空ミサイルですよね?

腰から上どころじゃないですよね?

・・・なんて命がけなんだ。

鷹堂に無理やり迫るなんて考えは毛頭無いが・・・もし向こうにそうだと誤解されたら、俺は即死亡だ。

「・・・」

やっぱりやめようかな・・・。

白神さんは、じつと事の成り行きを見ている。

「・・・祐一」

鷹堂をみる。その顔には不安の色が浮かんでいた。

・・・だから、そんな顔すんなよ。

「わかった、同意します。サインはどこに？」

傍らに置かれていたペンを取る。

「え、祐一——」

「ふふっ・・・ははははは！」

なにがおかしいのか、突然笑い出す鷹堂総裁。

「くくく・・・こんなバカは久しぶりだ。なかなかいないぞ。なあ、

綾香」

「はい。旦那様」

「・・・」

まあ、バカなのは自分自身よくわかっているが・・・。

「よし。貴様と舞華の仲を認めよう」

「・・・え？」

マジっすか。

「東館に君の部屋を用意してある。明日からの業務については綾香から聞け。以上だ」

——ん？

俺の部屋？業務？

「あの、仰ってる意味が・・・」

「君はたった今から「鷹堂財閥の令嬢」の正式な「彼氏」だ。一般人と同じ扱いはできないだろう」

んな勝手な。

「え、でも、両親にも相談しなくちゃ・・・」

「その件は問題ない。1時間前に話がついた。もう両親の老後について心配しなくていい」

「・・・」

なんて用意周到なんだ。

くいつくいつ

そのとき、燕尾服の裾（というのか？とにかく、やたらと長いアレだ）が引つ張られた。

振り返ると、舞華が上目遣いで聞いてきた。

「祐一はその・・・ここで暮らすのは嫌？」

「――」

実際、悪い条件でもない・・・かな？

「うん、じゃあお世話になろう・・・かな」

かくして、俺は舞華（とゆかいな仲間達）との、波乱万丈な日常が幕を開けた――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4375f/>

D.R.E.S.S.

2010年10月11日20時10分発行